

心理学概論書における「想像」と「構想」の扱われ方

How to treat "imagination" and "kohsouh" in text books of psychology.

半田智久 (お茶の水女子大学)

HANDA Motohisa (Ochanomizu university)

はじめに

「想像」という心的な活動ないし過程に対する心理学における扱われ方は、この学問が1つの独立した学問分野として認知されるようになってから現在までのおよそ百数十年の間、考察の主題とされうるか否かについて、その浮沈が激しかった。その状況を大ざっぱにまとめれば次のごとくであった。すなわち、実験心理学の幕開けから20世紀のはじめまでのあいだ、想像は概論において章立てで扱われる定番主題のひとつであった。ところが、そのうち20世紀の半ば以降、行動主義の台頭から認知論につながる流れのなかで、想像は一転して説明や研究対象の蚊帳の外におかれた。人によってはその状況を陶片裁判による追放劇とまで呼んだ(Holt, 1964)。しかし20世紀最後の四半世紀になると、想像はかつての身を隠すように、imageryやイメージという名のもとで表舞台に戻ってくる。とはいえ、想像(imagination)という概念そのものに押された「対象外」の烙印が容易に消えることはなかった。しかし、それも世紀を超えて21世紀の最近になって変化の兆しがみえはじめ、心理学の文脈において正面からこの話題をとりあげる論者があらわれはじめ、やっと名誉回復を果たすことになろうかというところである。

ここでは2つの文献調査資料を提示する。1つは上記の心理学における「想像」の扱われ方の変遷を心理学教科書、概論書における項目立てのされ方を頼りに調べた結果、すなわち「想像」が1つの章として扱われているか、別のテーマの章の中の節として扱われているか、独立した章や節としては扱われていないが、言及されている、あるいは言及が見あたらないといった判別基準をもって時系列に沿って通覧的に捉えた資料である。

もうひとつの資料は「想像」と似て非なる心的な営みと考えられる「構想」についての心理学教科書、概論書における扱われ方についての調査結果である。想像が上記のような状況にあったから、過去はともかく少なくと

も前世紀後半から最近までのところは「構想」の営みやそのころの過程が心理学において取りあげられて何らかの説明がなされているという状況はその筋の専門家でもおそらく見かけたためしがないにちがいない。その理由はいくつも考えられる。だが、ここではまず「構想」が主題にされるどころか、言及さえほとんどなされてこなかったという事実を確認すること、とくに前世紀前半に「想像」が心理学の定番主題として扱われていた時代においてはどうかであったのかを確認すること、むしろ言及があった場合、それはどのようにであったかを確認することを目標にした。

なお、構想(力)は現代の日本の社会・文化において固有の意味内容をもち、独自性をもって機能している概念である(半田, 2004)。この社会構成性、文化固有性を端的に示すように、このことばに適訳の英単語は存在していない。つまり、構想は少なくとも英語圏からの輸入概念ではない。したがって、資料2での検討対象の主体は翻訳以外の日本語で書かれた心理学概論書とした。また、心理学のテキストにおいて「想像」が扱われずして「構想」が扱われる可能性はかなり低いと考えられたため、資料対象は「想像」が主題になっていた古い時代のテキストを中心にランダムに50冊を選び、それぞれの著作の内容構成を概観しつつ「構想」と「想像」、およびそれらに関連が深いと思われる「創造」「図式」への言及、またとくに想像や構想に言及があった場合、その扱われ方について資料1よりもすこし細かく記述した。なお、記述順は資料1と同様、発行年代の古い順に取りあげた。

資料1 心理学概論書での「想像」の扱われ方

この資料はこれまでに刊行されたテキストを網羅的に調べ尽くすことを目標にしたものではない。また、教科書とか概論書という括りの基準を定めることは端から無理な話であった、したがって、調査努力は怠らな

かったものの概論書という判別については著者の恣意的な判断に依拠し、調査対象については翻訳書を含む和書を中心とし、洋書については調査の過程で手近に入手可能であった範囲にとどめた。結果的に調査標本となった著作数は和書 185 点、翻訳書 17 点、洋書 55 点の計 257 点であった。

以下、出版年の古い順に載せた。それぞれの項の先頭に付した記号の意味は次のとおりである。

- 「想像」に関する説明が、章立てとしてある。
- 「想像」に関する説明が、章内の節立てとしてある。
- 「想像」に関する説明が、章内の節立てとしてあるが、記述は 1 ページに満たない。
- ▲ 「想像」に関する説明は、章、節としても立てていないが節相当の分量での説明がある。
- △ 「想像」に関する説明は、章、節としても立てていないが、別の呼称たとえば「象徴過程」などで章立てし、事実上は想像を語るもそのことばを使っていない。
- 「想像」に関する説明は、章立て、節立て、節相当の説明、別呼称での説明のいずれもない

なお、「想像」についての言及があっても、それが数行程度に留まった場合は、章立て、節立て、節相当の説明、別呼称での説明のいずれもないという判断になっている。また、ここでは「想像」の英訳を "imagination" とした。

明治期まで

- Mill, J. 1829 "Analysis of the Phenomena of the Human Mind" Baldwin and Cradock.
章立てあり
- Payne, G. 1845 "Elements of mental and moral science. 3rd ed." Gladding.
Intellectual States of Mind のなかで "imagination"
- Haven, J. 1869 "Mental Philosophy: Including the Intellect, Sensibilities, and Will" Gould 西周訳 1878-79 『心理學』文部省。
章立てあり、章題「想像力を論ず」、原典タイトルは Imagination
- Bain, A. 1879 "Mental and Moral Science: part first

Psychology and History of Philosophy" Longmans, Green and Co.

Compound Association" の章で節 Imagination will be found most characteristically exemplified in Fine Art Constructiveness. Bain には他にも心理学関連の著作が豊富だが内容は目次設定ともほぼ同様であるためこの著作で代表。

△ Galton, F. 1883 /1907 "Inquiries into human faculty and its development" J.M. Dent & Co.
"Mental Imagery" として章立てあり

- Sully, J. 1884 "Outlines of Psychology: with Special Reference to the Theory of Education. D.Appleton and Co..

章立てあり、章題「Reproductive Imagination」と「Constructive Imagination」の 2 章

- Hickok, L.P. and Seelye, J.H. 1887 "Empirical Psychology: The Science of Mind from Experience" Ginn & Co..

The understanding の章で節 Imagination

- Baldwin, J.M. 1890 "Handbook of Psychology: Senses and Intellect" MacMillan and co.
章立てあり、章題「Imagination」

- James, W. 1890 "The Principles of Psychology" Henry Holt.
章立てあり、章題「Imagination」

- 元良勇次郎 1890 『心理学』東京金港堂。
章立てあり、章題「想像」

- Dewey, J. 1891 Psychology. 3rd rev. ed. Harper. 永野芳夫 1949 『デューイ心理学概説』春秋社。
章立てあり、章題「想像」

- James, W. 1892 Psychology, Briefer Course. Henry Holt. 今田寛訳 1992 『心理学 上・下』岩波書店。
章立てあり、章題「想像」

- 西村茂樹 1892 『心學講義』吉川半七講述本。
識性のなかの了識のひとつとして章相当の分量 (31 ページ) で「想像」を扱う

● Ladd,G.T. 1894 "Psychology: Descriptive and Explanatory: A Treatise of the Phenomena, Laws, and Development of Human Mental Life" Charles Scribner's Sons.

章立てあり、章題「Imagination」

■ Wundt,W. 1896 Grundriss der Psychologie. Leipzig: W.Engelmann. 元良 勇次郎・中島泰蔵 訳 1898-1899『ヴァント氏心理学概論・上中下巻』富山房. 章「明覚結合」の章で節の題名は付していないが、想像心像や想像活動を説明

● Titchener,E.B. 1899 "A Primer of Psychology, revised edition" Macmillan. 岡島亀次郎訳 1929『心理学概論』理想社出版部.

章立てあり、章題「記憶と想像」

● Stout,G.F. 1899 "Manual of Psychology" University Correspondence College Press.

章立てあり、章題「Belief and imagination」

■ 金子馬治 1900 頃『普通心理学』東京専門学校講述本. 「複雑なる知識作用」の章に節「直覚および想像」

● Calkins,M.W. 1901 "An Introduction to Psychology" The MacMillan Company.

章立てあり、章題「imagination」

● 元良勇次郎 1907『心理学綱要』弘道館.

章立てあり、章題「想像及連想」

● Angell, J. R., 1908 "Psychology : An introductory study of the structures and functions of human consciousness, 4th. " Holt. 上野陽一訳 1910『機能主義心理学講義』東京同文館.

章立てあり、章題「想像」

△ Lipps,T.V. 1909 "Leitfaden der Psychologie" W. Engelmann. 大脇義一訳 1934『心理学原論』岩波書店. 章、節ともにないが、「主観的に制約された判断」の章で假想や幻覚、「心的生活の最も一般的な事実」で表象の連合について説明

大正期 1912 明治 44= 大正元年

● 上野陽一 1914『心理学通義』大日本図書.

章立てあり、章題「想像」

■ 元良勇次郎・元良信太郎 1915『心理学概論』丁未出版社・東京実文館.

章立てなし、節立てあり、章「意識の表現性」のなかで「再生表象と想像」

▲ 高橋稷 1917『哲学叢書第十二編 心理学』岩波書店. 章立てなし、節立てなし、ただし章「思惟」のなかで説明

● Robinson,E.S. and Robinson,F.R. 1923 "Readings in General Psychology" The University of Chicago Press.

章立てあり「Imagination and Dreams」

▲ 松本亦太郎 1923『心理学講話』改造社.

章立てなし、節立てなし、ただし章「認識」観念の結合などのなかで説明

△ The Plebs Textbook Committee 1924 "An outline of psychology.4th. ed." Plebs League. 小宮 義孝 訳 1931『心理学概論』改造社.

章「理性」において「心像」や「構想」の節あり、この「構想」は imagination の訳としてあり、再生想像とその組み合わせについて簡単に触れている。

● 青木庄左衛門 1925『新心理学要義』モナス.

章立てあり「想像」

(1925 日本でラジオ放送開始)

昭和期 1926 大正 15= 昭和元年

● 關寛之 1927『心理学原論』厚生閣書店.

章立てあり「想像及び夢」

■ 稲毛金七 1932『統一心理学』世界堂書店.

「再生知覚」という章相当区分で「想像」の節あり

○ 小野島右左雄 1932『最近心理学概説』中文館書店.

なし

● Franz, S.I. and Gordon, K. 1933 "Psychology" McGraw-Hill.

章立てあり "imagination"

● Lund, F.H. 1933 "Psychology: An Empirical Study of Behavior" The Ronald Press Co..

章立てあり、章題「Sleeping, dreaming and Imagining」

○ 丸山良二 1934 『心理学』 藤井書店.

なし

(1937 蘆溝橋事件～日中戦争)

● 桂広介 1937 『心理学通論』 巖松堂書店.

章立てあり、章題「想像」

○ 桂広介 1938 『心理学序説』 巖松堂書店.

なし (想像について現実度という観点から言い直してかなり書いている)

● 今田恵 1939 『心理学』 育芳社.

章立てあり、章題「思考及び想像」

○ 寺門照彦 1939 『最近心理学原論』 同文館.

なし

(1941 太平洋戦争開戦)

○ 正木正 1941 『心理学』 刀江書院.

なし

● Sargent, S.S. 1944 "The Basic Teachings of the Great Psychologist" Barnes & Noble. 椎名新一訳

1951 『現在の心理学: 人とその学説』 誠文堂新光社.

章立てあり、章題「表象、想像、夢」

● 後藤弘毅 1945 『新制心理学概説』 廣文堂.

(1945 敗戦)

▲ 黒田亮 1947 『心理学概論』 三省堂.

章立てなし、節立てなし、ただし章「表象および概念」などのなかで説明

○ 戸川行男・本明寛 1947 『心理学序説』 光の書房.

なし

● Boring, E.G., Langfeld, H.S., and Weld, H.P. 1948 "Foundations of Psychology" John Wiley and Sons.

章 "Recollecting, Imagining and Thinking" としてあり

○ Johnson, D.M. 1948 "Essentials of Psychology: An Introductory Textbook" McGraw-Hill..

なし

● 大脇義一 1948 『心理学概論』 培風館.

章立てあり、章題「思惟と想像」

● 久保良英 1948 『心理学要論』 目黒書店.

章立てあり、章題「想像」

○ 千輪浩 1948 『現代心理学』 東海書房.

なし

○ 依田新 1948 『新心理学』 草美社.

なし

■ 安倍三郎 1949 『心理学概論』 福村書店.

章立てなし、節立てあり、章「表象」で節題「想像表象」

■ Dashiell, J.F. 1949 "Fundamentals of General Psychology. 3rd. ed." Houghton Mifflin Co..

章 "Thinking" のなかに節 "The Involvement of Imagery in Thinking" としてあり

● 小野島右左雄 1949 『心理学要説』 草美社.

章立てあり、章題「思考と想像」

● 正木正 1949 『改訂心理学』 壮文社.

章立てあり、章題「想像」

▲ 正木正 1949 『心理学通論』 大明堂書店.

章立てなし、節立てなし、ただし章「知性」のなかで説明

● 増田惟茂 1949 『心理学概論』 小山書店.

章立てあり、章題「意志、想像、思考」

○ 小熊虎之助 1949 『現代心理学の実際』 北光書房.

なし、わずかに言及あり

△ 佐藤幸治編著 1949 『心理學汎説』黎明書房。
章立てなし、節立てなし、ただし、「象徴的過程」の題
で章を立て、そのなかで心像や連想、概念などを説明し
ている。

○ 武政太郎 1949 『心理学』教育科学社。
なし

○ 戸川行男・本明寛 1949 『心理学』警醒社書店。
なし

○ 横山松三郎・林嶽 1949 『現代心理學序説』明治書院。
なし

△ Keller, F.S. & Schoenfeld, W.N. 1950 "Principles
of Psychology: A Systematic Text in the Science of
Behavior" Appleton-Century-Crofts.
行動理論に沿った内容だが、Chaining の章で Covert
response の説明において言及

○ 城戸幡太郎 1950 『現代心理學—その問題史的考察』
評論社。
なし（わずかに言及はあるが）

○ 戸川行男・本明寛 1950 『心理学要説』金子書房。
なし
「表象体験」として想像を換言して消極的に説明する節
は設けている。

○ 矢田部達郎 1950 『心理學序説』創元社。
なし

■ 小保内虎夫 1950 『人間科学としての心理学』世界社
章立てなし、節立てあり、章「心像」で節題「想像心像」

● 大脇義一 1951 『心理學』培風館。
章立てあり、章題「想像と思维」

○ 相良守次 1951 『心理学』朝日新聞社
なし

○ 矢田部達郎 1951 『心理學初歩』創元社。
なし

● 今田恵 1952 『心理学』岩波書店。
章立てあり、章題「思考及び想像」

(1953 日本でテレビ本放送開始)

● Dempsey, P.J.R. 1953 "Psychology for everyone"
Newman Press. 四谷次郎訳 1962 『万人の心理』中央
出版社。
章立てあり、章題「想像」

■ Hilgard, E.R. 1953 "Introduction to Psychology"
Harcourt, Brace and Company.
章 "Thinking" で "Thinking as Creative Imagination"
あるいは "Thinking in Reverie and dream" などの節立
てで想像に言及

■ 本明寛・清原健司 1954 『心理学序説』金子書房。
章「記憶」で節「回想、連想、想像」としてあり

○ 望月衛 1954 『一般心理学』要書房。
なし

○ 依田新 1954 『改訂心理学』形成社。
なし

● Karn, H.W. & Weitz, J. 1955 "An Introduction to
Psychology" John-Wiley & Sons.
章立てあり、章題「Imagination and Thinking」

● 千輪浩監修 1957 『心理学』誠信書房。
章立てあり、章題「思考・想像・夢」

○ 乾孝・高木正孝 1957 『心理学』青木書店。
なし

● 桂広介 1957 『心理学入門』金子書房。
章立てあり、章題「記憶と想像」

● 中村秀 1957 『心理学』朝倉書店。
章立てあり、章題「想像および思考」

○ 高木貞二 1957 『心理學』東京大学出版会。
なし

○ 田中寛一・古賀義義編 1958 『心理学原論』日本文化

科学社.
なし

■ 今田恵 1958 『現代の心理学』岩波書店.
章「思考と動作」で節「想像」

■ Krech,D. and Crutchfield,R.S. 1958 "Elements of Psychology" Alfred A.Knopf.
章"The World of Problems"のなかで節"Images and Thinking"としてあり

○ 小熊虎之助編 1958 『現代心理学の展望』誠信書房
なし

○ 望月衛 1958 『心理学新講』塙書房.
なし

○ 猪熊佐登留・広田君美 1960 『教養心理学』誠信書房.
なし

○ 岡本重雄・永丘智郎編 1960 『現代心理学概論』朝倉書店.
なし

○ 相良守次 1960 『図解心理学』光文社.
なし

● 千輪浩監修 1961 『心理学 改訂版』誠信書房.
章立てあり、章題「思考・想像・夢」

● Leuba, C.J. 1961 "Man : a general psychology" Holt, Rinehart and Winston.
章"Thought Sequences and Their Determinants"のなかの節 " Creative Aspects of Thinking - imagination"

○ Lingren,H.C. & Byrne,D. 1961 "Psychology: An Introduction to the Study of Human Behavior" John-Wiley & Sons.
なし

△ Morgan, C.T. 1961 "Introduction to psychology 2nd ed." McGraw-Hill.
章"Language and Thinking"で節"Role of Images"のかたちでわずかに

○ 相良守次編 1961 『心のはたらき：現代心理学への招待』大日本図書.
なし

○ 高木貞二編 1961 『心理學 新版』東京大学出版会.
なし

○ Munn,N.L. 1962 "Psychology: Fundamentals of Human Adjustment 4th.Ed." Houghton Mifflin Co..
なし

▲ Geldard,F.A. 1962 "Fundamentals of Psychology" John Wiley & Sons.
章「Problem Solving and Thinking」で imagery and Thought の節で imagery として言及

● Smirnova, A. A. 1962 "Psikhologiya : uchebnik dlia pedagogicheskikh institutov". 柴田義松・鳥至・牧山啓訳 1965 『心理学：ソビエトの教科書』明治図書出版.
章立てあり、章題「想像」

○ 須藤容治 1962 『心理学概説』東洋館出版社.
なし

○ Kendler,H.H. 1963 "Basic Psychology" Methuen.
なし、ただし想像による筋電図反応の話やフラストレーションとの関係については言及

■ 本明寛 1963 『心理学序説改訂版』金子書房.
章「思考」で節「想像」としてあり

○ 末永俊郎編 1963 『現代心理学入門』有斐閣.
なし

○ Adcock,C.J. 1964 "Fundamentals of Psychology" Penguin Books. 深田尚彦訳 1965 『基礎心理学』誠信書房.
なし

▲ Das,S.S. 1964 "General Psychology" Asia Publishing House.
章"Thinking"のなかで Imaginative thinking として言及

● 盛永四郎 1964 『一般心理学』明玄書房。
章立てあり、章題「思考と想像」

○ 相良守次編 1964 『現代心理学の諸学説』岩波書店。
なし

○ Isaacson,R.L., Hutt,M.L., and Blum,M.L. 1965
"Psychology: The Science of Behavior" Harper &
Row.
なし

▲ Sanford,F.H. 1965 "Psychology : a scientific study
of man. 2nd ed." Wadsworth Pub. Co.
節相当あり、章 "Higher Mental Processes# で "Images
in Thinking" として

■ 田中教育研究所編 1965 『心理学』日本文化科学社。
章「知性と感情」のなかの節「知性」において小節とし
て「想像」あり

○ 遠藤汪吉・前田嘉明編著 1966 『心理学への招待』六
月社。
なし

■ Hebb,D.O. 1966 "A Textbook of Psychology"
W.B.Saunders Co..
章 "Making Inferences from Behavior" で節 "Imagery:
The Objective Treatment of Subjective Evidence" と
してあり

○ Lindgren,H.C., Byrne,D. and Petrinovich,L.
1966 "Psychology : an introduction to a behavioral
science. 2nd ed." J. Wiley.
なし

○ McKeachie,W.J. and Doyle, C.L. 1966
"Psychology" Addison-Wesley Pub. Co.
なし

○ 宮田義雄 1966 『心理学序説』前野書店
なし

○ Helson,H. and Bevan,W. (Eds.) 1967
"Contemporary Approaches to Psychology" D.Van
Nostrand Co..

なし

○ 入谷敏男・林貞子 1967『心理学入門』東海大学出版会。
なし

○ 滝沢武久・柴田義松 1967 『現代の心理学』明治図書
出版。
なし

○ 八木晁編 1967 『心理学 I ~ III』培風館。
なし

● 相良守次 1968 『心理学概論』岩波書店。
章「想像と夢」

▲ Engle,T.L. & Snellgrove,L. 1969 "Psychology: Its
Principles and Applications. 5th." Hartcourt, Brace
& World.
章「The process of thinking」のなかで節「imagining」
を設けて imagination に言及

○ Communications Research Machines Inc.
1970 "Psychology Today: An Introduction"
Communications Research Machines Inc.
なし

○ 遠藤汪吉・蓮尾千萬人編 1970 『現代心理学』ミネル
ヴァ書房。
なし

○ 加藤義明・加藤紀子 1970 『心理学』法政大学出版局。
なし

○ 安藤公平・菱倉昌太郎・木村政男・山岡淳 1971 『こ
ころの科学』駿河台出版社。
なし

△ 詫摩武俊・金城辰夫・大山, 正 1971 『心理学を学ぶ』
有斐閣。
章「思考心理学を学ぶ」のなかで寺岡隆が「予想と決定」
というタイトルで書いている。

○ Hepner,H.W.. 1973 "Psychology Applied to Life
and Work. 5th." Prentice-Hall.
なし

- 西昭夫 1973 『心理 — 行動からの探究』 福村出版.
なし
- 大山正・詫摩武俊編 1973 『心理学通論』 新曜社.
なし
- 塩川武雄ら 1973 『心理学要論』 礒光出版.
なし
- Wolman, B.B. (Ed.) 1973 "Handbook of general psychology" Prentice-Hall.
なし
- Kimble, G.A., Garmezy, N., and Zigler, E. 1974 "Principles of General Psychology 4th. ed." The Ronald Press Company.
なし、認知論の Imagery への言及はある
- 荻野源一編 1974 『心理学』 福村出版.
なし
- ▲ Brown, R. & Herrnstein, R.J. 1975 "Psychology" Methuen.
章「Icons and Images」で基本的には心的回転など認知論としての説明だが、1910の Perky < C.W. An experimental study of Imagination. American J. of Psychology, 21, 422-452. の実験を引用して imagination に言及
- Lurii, A. R. 1975 Материалы к курсу лекций по общей психологии. 天野清訳 1980 『ルリヤ現代の心理学』 文一総合出版.
なし
- Mednick, S.A., Higgins, J. & Kirschenbaum, J. (Eds.) 1975 "Psychology: explorations in behavior & experience" John Wiley & Sons. 外林大作・島津一夫編著 1979 『心理学概論: 行動と経験の探究』 誠信書房.
なし
- ▲ Metzger, W. 1975 "Psychologie: Die Entwicklung ihrer Grundannahmen seit der Einführung des Experiments" Dr. Dietrich Steinkopff Verlag. 大村敏輔訳 1997 『心理学 実験導入後の心理学における基本仮定の発展』 九州大学出版会.
章「心的現実の問題」で言及
- Eysenck, H.J. & Wilson, G.D. 1976 "A Textbook of Human Psychology" MIT Press. 塩見邦雄監訳 1984 『心理学概論』 創元社.
なし
- 井上隆二・山下富美代・斎藤勇 1976 『心理学 行動理解のために』 現代情報社.
なし
- Lamberth, J., McCullers, J.C. and Mellgren, R.L. 1976 "Foundations of psychology" Harper & Row.
なし
- 塩川武雄ら 1976. 『要説心理学』 酒井書店.
なし
- Whittaker, J.O. 1976 "Introduction to Psychology. 3th.", W.H. Saunders Co..
なし
- 金子隆芳・古崎敬編 1977 『現代心理学要説』 日本文化科学社.
なし
- 麦島文夫・安香宏・森武夫 1977 『心理学要論』 有斐閣.
なし
- Buss, A.H. 1978 "Psychology: Behavior in Perspective. 2nd." John-Wiley & Sons.
章「Imagery and Fantasy」であり、ここの問いが What is Imagination? となっている。
- 澤田慶輔・古畑和孝編 1978 『人間科学としての心理学』 サイエンス社.
なし
- 詫摩武俊編 1978 『心理学』 新曜社.
なし
- Belkin, G.S. and Skydell, R.H. 1979 Foundations of Psychology. Houghton Mifflin Co..
なし

- 原岡一馬・河合伊六・黒田輝彦編 1979『心理学 人間行動の科学』ナカニシヤ出版.
なし
- 村田孝次 1979『教養の心理学 改訂版』培風館.
なし
- 井上恵美子・平出彦仁編 1980『現代社会の心理学』文化書房博文社
なし
- 金子靖 1980『心理学の基礎』文化書房博文社.
なし
- 大橋正夫・長田雅喜編 1980『心理学』福村出版.
なし
- 大村政男・岡村浩志・清水敦彦・常磐満 1980『心理学概論』福村出版.
なし
- 小野章夫編 1980『現代心理学の諸相』誠信書房.
なし
- 内山道明編 1980『心理学の世界』福村出版.
なし
- 梅岡義貴・大山正編 1980『心理学の展開 大学教養選書』学文社.
なし
- Zimbardo,P.G. 1980 "Essentials of Psychology and Life.10th." Scott, Foresman and Co.. 古畑和孝・平井久監訳 1983『ジンバルドー現代心理学I～III』サイエンス社.
なし
- 赤松保羅・亀井一綱・平出恭仁 1981『新版心理学』金子書房.
なし
- Darley,J.M., Glucksberg,S., Kamin,L.J. & Kinchla,R.A. 1981 "Psychology" Prentice-Hall.
なし
- 江川政成 1981『心理学』福村出版.
なし
- 早坂泰次郎 1981『新版現代人の心理学』川島書店.
なし
- 宮田義雄 1981『教養の心理学 改訂版』前野書店.
なし
- 島津一夫・水口禮治 1981『心理学要説』誠信書房.
なし
- 市川典義・増田末雄編 1982『心理学 —基礎と応用』福村出版.
なし
- 蔭山庄司監修 1982『心理学 人間行動の科学』北大路書房.
なし
- 濱田哲郎・園田五郎・白樫三四郎編 1982『現代の心理学 — 人間の心理と行動』朝倉書店
なし
- 金子隆芳編 1982『現代心理学要論』教育出版.
なし
- 森野礼一編著 1982『現代の心理学』ミネルヴァ書房
なし
- 白井常 1982『心理学 一人はどう生き、考え、集うのか—』光生館.
なし
- 青柳肇・滝本孝雄・岡本敏雄 1983『現代心理学の探求』福村出版.
なし
- 畠山忠編著 1983『心の探究：現代心理学入門』黎明書房.
なし
- Lahey,B.B. 1983 "Psychology: An Introduction. 3rd." Wm.C.Brown Publishers.
なし

- 小口忠彦 1983 『人間のこころ 心理学はどう答えるか』有斐閣
なし
- 津留宏・小嶋秀夫編 1983 『概説心理学』有斐閣。
なし
- 梅岡義貴・大山正編 1983 『心理学の展開 大学教養選書 改訂版』学文社。
なし
- 青柳靖夫・三本茂 1984 『現代心理学の基礎 新版』国土社。
なし
- 藤永保 1984 『増補現代心理学』筑摩書房。
なし
- 福田幸男編 1984 『心理学』川島書店。
なし
- 金城辰夫・野口薫執筆代表 1984 『心理学概論 現代人のこころを解明』有斐閣。
なし
- 日上泰輔・糸川民生・上岡国夫 1984 『心理学 理論と実際』福村出版。
なし
- 堀ノ内敏編著 1984 『心理学 改訂版』福村出版。
なし
- 漁田武雄・岡野恒也・真田孝昭・高嶋健一・高橋たまき・中森正純・林部敬吉 1984 『心理学』酒井書店。
なし
- 西昭夫・國分康孝・山中祥男・菅沼憲治編 1984 『心理学』福村出版。
なし
- 野西恵三編 1984 『心理学：人間理解と援助的接近』北大路書房。
なし
- 佐伯茂雄・野々村新・田之内厚三編 1984 『改訂心理学の展開』福村出版。
なし
- 関忠文 1984 『心理学セミナー』福村出版。
なし
- 青木民雄・内藤徹編 1985 『心理学要論』福村出版。
なし
- 浅井邦二・稲松信雄・上田敏晶・織田正美・木村裕・本間修・増井透・宮下彰夫・本明寛 1985 『現代心理学入門』実務教育出版。
なし
- 原岡一馬編 1985 『心理学 人間行動の探求』福村出版。
なし
- 中川大倫 1985 『心理学概論 II』日本放送出版協会。
なし
- 岡堂哲雄 1985 『心理学ヒューマンサイエンス』金子書房。
なし
- 岡野弘 1985 『増補改訂版心理学要説』高文堂出版社。
なし
- 大橋正夫・長田雅喜編 1985 『心理学 [改訂版]』福村出版。
なし
- 辰野千寿編 1985 『心理学』日本文化科学社。
なし、認知のイメージについてはある
- 麦島文夫・安香宏・森武夫 1985 『新版心理学要論』有斐閣。
なし
- 氏原寛・西村洲衛男・東山紘久編 1985 『心理学』培風館。
なし
- 水口禮治 1986 『市民のための心理学』福村出版。
なし

- Morgan,C.T., King,R.A., Weisz,J.R. & Schopler,J. 1986 "Introduction to Psychology. 7th." McGraw-Hill.
なし
- Bower,G.H., Bootzin,R.R., Zajong,R.B. & Hall,E. 1987 "Principles of Psychology. Today" Random House.
なし
- 田島信元 1987『現代心理学のすすめ』福村出版.
なし
- 若松利昭ら編 1987『テキスト心理学』福村出版.
なし
- 渡辺浪二ら編著 1987『心理学入門』ブレーン出版.
なし
- 橋本仁司編著 1988『新版入門心理学』学文社.
なし
- 石川英夫 1988『心理学の探求』文化書房博文社.
なし
- Kagan,J. and Segal,J. 1988 "Psychology An Introduction. 6th. ed." Harcourt Brace Jovanovich.
なし
- 神谷育司編 1988『心理学 人間理解の方法序説』福村出版.
なし
- Lindzey,G., Thompson,R.F. & Spring,B. 1988 "Psychology. 3rd." Worth Publishers.
なし
-
- 平成期 1989 昭和 64= 平成元年
-
- 長尾勲編 1989『心理学を学ぶ』ナカニシヤ出版.
章「学習・記憶」のなかの節「思考と言語」のさらに小節で「創造と想像」として5行触れている。
- Worchel,S. & Shebilske,W. 1989 "Psychology: Principles and Applications. 3rd." Printice Hall.
なし
- 波多野完治 1990『心理学：認識と感情』小学館.
なし
- 大山正・杉本敏夫編著 1990『ホーンブック心理学』金子書北樹出版.
なし
- Gleitman,H. 1991 "Psychology 3rd." W.W. Norton & Co..
なし
- 箱田裕司監修 1991『心のしくみ』関東出版社.
なし
- 狩野素朗・山内隆久編 1991『要説現代心理学：人間・社会・文化』ナカニシヤ出版.
なし
- 本明寛編 1991『新・心理学序説改訂』金子書房.
なし
- 金子隆芳監修 1992『心理学フロンティア 心の不思議にせまる』教育出版.
なし
- 久米稔編著 1992『現代の心理学』前野書店.
なし
- 藤嶋良雄 1992『概説心理学』酒井書店.
なし
- 岡田督 1993『心理学 理論とその応用』ナカニシヤ出版.
なし
- 大山正・詫摩武俊・中島力 1993『心理学[新版]』有斐閣.
なし
- Benjamin,Jr., L.T., Hopkins,J.R. & Nation,J. R. 1994 "Psychology. 3rd." MacMillan College Publishing.
なし

○ 伊吹山太郎監修 1994 『現代の心理学』 有斐閣
なし

■ 丸野俊一・針塚進・宮崎清孝・坂元章 1994 『心理学の世界』 有斐閣.

章「イメージの世界を探る」のなかの節「世界を作る活動としての想像」としてあり

○ 白樫三四郎編 1995 『現代心理学への招待』 ミネルヴァ書房.
なし

△ Atkinson, R.L., Atkinson, R.C., Smith, E.E., Bem, D.J. & Nolen-Hoeksema, S. 1996 "Hilgard's Introduction to Psychology. 12th." Harcourt College Publishers.

Imagery や Imaginal Thought としてイメージ論の心的回転などの説明は節としてあり。

○ 東江平之 1996 『心理学へのアプローチ・心理学からのアプローチ』 北大路書房.
なし

○ 鹿取廣人・杉本敏夫編 1996 『心理学』 東京大学出版会.
なし

○ 松田隆夫編 1997 『心理学概説 心と行動の理解』 培風館.
なし

○ Banyard, P. & Grayson, A., 2000 "Introducing Psychological Research Seventy Studies that Shape Psychology 2nd." PALGRAVE.
なし

○ 長谷川寿一・東條正城・大島尚・丹野義彦 2000 『はじめて出会う心理学』 有斐閣.
なし

○ Pawlik, K. & Rosenzweig, M.R. 2000 "International Handbook of Psychology" SAGE publications.
なし

○ 神田義浩・唐川千秋・山下京子・森田裕司・廣兼孝信 2002 『心理学ナビゲータ』 北大路書房.

なし

○ 加藤伸司・中島健一編著 2002 『心理学』 ミネルヴァ書房.
なし

○ 榎本博明 2003 『はじめてふれる心理学』 サイエンス社.
なし

○ 伊藤隆一・千田茂博・渡辺昭彦 2003 『現代の心理学』 金子書房
なし

○ 西野泰広編著 2003 『こころの科学』 東洋経済新報社.
なし

○ 無藤隆・森敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治 2004 『心理学—Psychology: Science of Heart and Mind』 有斐閣.
なし

○ 浅井千秋編 2005 『心理学を学ぶ』 東海大学出版会.
なし

○ 森正義彦編著 2005 『理論からの心理学入門』 培風館.
なし

○ 中島義明・繁榎算男・箱田裕司編 2005 『新・心理学の基礎知識』 有斐閣.
なし

○ 若山隆良・松原宏明編著 2006 『人と心の科学？人間理解と援助の心理学？』 八千代出版.
なし

▲ 内田伸子編著 2005 『心理学 こころの不思議を解き明かす』 北生館.
章「子どもは出来事をどのように記憶し想起するか」において、想像物に対する出来事の想起について言及

○ 藤岡新治・山上精次共編 2006 『図説現代心理学入門 3訂版』 培風館.
なし

○ 羽生義正 2006 『心理学への扉 心の専門家へのファー

ストステップ』北大路書房。
なし

○ 星薫・山口勲・青木紀久代著 2006『心理学入門』放送大学教育振興会。
なし

○ 岡市廣成・鈴木直人編 2006『心理学概論』ナカニシヤ出版。
なし

○ 山内弘継・橋本宰監修 2006『心理学概論』ナカニシヤ出版。
なし

○ 安斉順子編著 2007『あたりまえの心理学？心理学入門？』文化書房博文社。
なし

○ 広中直行 2007『心理学へのスタディガイド』世界思想社。
なし

○ 海保博之 2007『認知と学習の心理学？知の現場からの学びのガイド？』培風館。
なし

○ 神田信彦・金子尚弘編著 2007『心を科学する心理学』河出書房新社。
なし

○ 森正義彦・篠原弘章 2007『心理学研究法？科学の本質から考える？』培風館。
なし

○ 藤田主一・板垣文彦編 2008『新しい心理学ゼミナール：基礎から応用まで』福村出版。
なし

○ 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃編 2008『心理学 第3版』東京大学出版会。
なし

○ 島田博祐・梶原直樹・徳田克己編著 2008『入門心理学 わかりやすく学ぶ基礎・応用』

なし

○ 今井久登・平林秀美・工藤恵理子・石垣琢磨 2009『心理学をつかむ』有斐閣。
なし

○ 山祐嗣・山口素子・小林知博編著 2009『基礎から学ぶ心理学・臨床心理学』北大路書房。
なし

資料2 心理学概論書での「構想」の扱われ方

この資料2では資料1で取りあげた257冊のなかから、日本人の著者によるテキスト(1点は例外で翻訳書)、とりわけ「想像」を主題に扱っていることが多い古い時代の書籍を中心にランダムに50点を選んだ。それぞれの内容構成に触れながら、想像、構想、創造、図式への言及の有無をチェックし、とくに想像および構想については主題、説明事項としての扱い方について調べた。

■ 元良勇次郎 1907『心理學綱要』弘道館。
構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

帝国大学で初めて心理学の教授に就任した元良勇次郎の著作のひとつである。講義形式で口語体に近く、自分のことばを使って身近な例を引きながら随筆風に書かれたテキストである。そのためか明治末期から大正期にかけて多くの版を重ね、広く流通したようであり、参照した原典は著者の没後である大正4年の刷りで第60版(刷)であった。ただし、エッセイ風の気軽さがおもてに出ているためか、とくに独自の考察を下すところは興味深いのだが、必ずしも同列に比較できそうにない概念間、たとえば想像と概念、観念、連想とのあいだの差異を比較しようとするところなどに、やや疑問を感じるところが目立つ。

全体の構成は章立てというより、講義の回数に見立てて12回構成としている。回によっては続きとしているが、その重複を避ければ、タイトルは以下のとおりである。「心理学は何を研究する学か」「研究の方法および範囲」「神経の構造および生理」「意識、表象、注意」「精神の要素について」「感覚論」「知覚表象および記憶」「想像および連想」「概念および推論」「感情論」「本能および意志」。

想像については「想像及連想」の回で章立て相当の分

量を使って比較的詳しく説明している。その定義を引用しておけば、

「想像とは記憶表象が精神中において幾分かの分解を受け、分解されたこれらの表象中において甲の一部分と乙の一部分とが連合して、一の新たなる表象をつくるのである。こうしてつくられた表象もしくは表象の集合が想像である」

記憶や概念、観念と想像の相違、人により視聴運動感覚など偏りのある表象の感覚様相、連想などについて説明している。

「意識、表象、注意」の回では表象との関連で「無念無想とは何ぞや」という節を設けて説明を加えている点などは目を引く。

構想についての言及は認められない。

■ 高橋穰 1917『哲学叢書第十二編 心理学』岩波書店・全406頁
構想なし、想像あり、創造あり、図式なし

大正6年初版であるから、W. James や W. Wundt の影響を強く受けたかたちで20世紀初頭の黎明期にある心理学の姿をよく映し出している教科書である。感覚についての記述にはじまり注意や記憶、空間知覚といったテーマを扱っているほかに、当時を反映して情緒や意志、感情といった主題も章立てられている。本書が哲学叢書の一編として成立していることも当時の状況を映じているといえよう。

構想についての記述はないが「思惟」という章立てのなかで思惟の一つのあり方を想像とみる記述がある。この部分は多分に構想と重なっているとみることもできる。この想像について語られている箇所はやや長いが引用する（適宜、現代仮名遣いと漢字に変更している）。「思惟はその構成要素の性質から二種に分かたれる。すなわち具体的表象を部分表象としている思惟を想像といい、抽象的表象を部分表象とする思惟を狭義の思惟という。しかし實際上想像が抽象表象を含むことも、狭義の思惟が具体表象を混ざることもありうるから、この区別は厳密には適用せられぬ。もともと想像という語ははなはだいろいろの意味に用いられ、表象結合の意味するところが実際世界には決してあらわれないという点を重くみるもの（空想）、あるいはそれが過去の経験の再生であるか（再生想像）ないか（創作想像）という点から、あるいは全体に通ずる意味がなくただある感情にまかせて表象が連合せられる（妄想または空想）という点か

らみるものなどいろいろあるが、余はヴントの説によって上のごとく区別しておく」

想像の意味の多様性に触れ、再生想像と創作想像を対比的にとらえたのち、前者は「記憶」の章を設けて検討している。創作想像については探究をおこなっていない。高橋は続けてつぎのように述べている。

「しからば武陵桃源の春の景色や、百雷の落ちる音の实在しうるや否やを思惟するのは狭義の思惟である。もともと W. Wundt は「想像は心像による思惟である」と称し、想像作用は直観のごとく明瞭な心像からなるものとみているが、しかし想像表象の具体的なものは意味の上のことであるから、必ずしも、それが感官的明瞭性を与えていなくともよいのである。要するに両者の差別は比較的のことであるから、狭義の思惟を主として論ずる本章においては、単に思惟といえば狭義の思惟を指すこととし、想像の方には触れぬこととする」

こうして思惟の一翼として想像の領域を認めるも、自分がここで扱うのはもう一方の狭義の思惟についてであると考察の対象を絞っている。正直な書きぶりだが、心理学における想像や構想の扱いは実際のところ、この種の棚上げが尾を引いて、そのうち棚に上げられたことがらを降ろすことがたいへんになったり、忘れられたりしてそのままになってしまった部分も少なくないようである。

■ 松本亦太郎 1928（改訂43版）（初版は1923）『心理学講話』改造社・全450頁
構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

松本は20世紀初めに京都帝大で心理学講座を新設し、この書を執筆した頃に日本心理学会を創設して初代会長になった。その彼の代表的教科書である。序ではこれまでの心理学が心を分析的にみつめたことで論が抽象的になりすぎたことや、主として個人の心を扱ってきたことを語り、その反省にたつてこの書では日常生活を送る人の具体的な作業や動作を扱い、集団としての人間も対象にして応用領域まで見通すかたちで当時の心理学の全体を捉えようとしたことが語られている。その狙いどおり、内容は当時の心理学の状況とそこにいたる潮流をおさえのちに、大きく「精神的機能」「精神的素質」「社会的精神作用」「心理学応用」にわけ、「精神的機能」では認識、感情、意志を、「精神的素質」では情意的素質、智的素質、智能の遺伝を、「社会的精神作用」では社会意志、その選択的活動、社会意志と個人との関係とい

た章立てで論を展開している。

現在の心理学からみると、その構成に独創性が感じられ自由な筆致に惹きつけられるところが多い。

構想にかかわる記述はないが、認識作用におけるそれとして統覚に関する説明や、構想が宿す行為的側面に関係すると思われる記述が多く認められる。また、想像については比較的多くの言及がある。たとえば、統覚については心のなかにあるものが明瞭に覚識されることで、注意の作用と重なって意識の中心にあたる部分であるとする。例示として障子をあげ、しばらくそれを見つめていると、井桁にみえたかと思うと市松模様になり、さらには札束のようにもみえてくると、いかにもその時代にあってこの原稿が書かれたときの様子まで見えてくるような例示をしている。そうしながら、意識的な注意の振り方でまわって知覚される内容、統覚が変化することを伝えている。

また、こんな例もあげる。一方に兄という観念、他方に弟という観念がある。それを統覚で結びつけ、兄弟という観念にすると新たな意味、すなわち同胞という意味が生じると。これは統覚的総合の例だという。さらにこの統覚的総合により概念が生成されるという。甲乙丙の人をみて同じ特徴を拾うことによって生じるのが日本人という概念だと。日本人という概念そのものの実体はないが、概念とはそもそもこのように統覚的総合によってつくられるのだという。

「そういうようにものを概括的に結びつけ、連想関係あるいは類同の関係を基礎にして、事物を論理的に結びつけてできた精神的の内容が概念である」

と。この概念を使ってものを考えていくことができ、ものごとの理解ができるとする。同様に概念というよりも知覚的な観念による心像を材料にして考えることもでき、それが想像だとする。つまり、松本にとって理解と想像は用いる素材が違うだけの同じ思考のプロセスということになる。想像による思考を重視するのが詩人、歌人、文学者たちで、概念の理解によって思考する代表格は哲学者や数学者だとする。

また、社会的精神作用が論じられた部分では、社会意志と個人との関係を述べている章で、常識や社会的に尋常という基準から逸脱した人として社会的判断の劣悪な人とか奇人といったタイプについて説明されている。そのなかに「先覚者」という括りもあり、これは構想力を行為論としてみたときに当てはまることも思われる。その記されている内容に簡単に触れておく。

先覚者はやはり社会の尋常からは逸脱しているが、敬服すべき識見をもち、しかもそれが他の人の思いおよび

ぬ独創性をもった創見になっている。しかも社会的判断は健全であって、その点では同じく社会の尋常から逸脱した畸人の天才とは異質である。また、不平家ではなく、社会のために自分の身を致すことをつとめと考えている。その例として福沢諭吉をあげる。理想的なことをいうが高遠ではなく、世の中の一步先をいく。他者をして実は自分も同じことを考えていたといわせるようなことを先んじて言い、おこなう人。それが常に、であるから、世の人は追いつくことができるけれども、追いついたときにはまた一步先にいて人を引っ張る。先覚者とはそういうゼノンのパラドクスを地でいくような人物である。これこそ社会の改良者として重要な人物なのであると。

おもしろいのはこの先覚者がいよいよ極まったかたちが聖賢ともいふべき存在で、ソクラテスや孔子、キリストといった例になるが、ここまでいたると今度はその時代の社会では受容されがなくなり、その個人は社会意志に淘汰されることになりがちであると結んでいる。

■ 桂広介 1937『心理学通論』巖松堂書店・全180頁

構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

コンパクトな書物ながら、全12章構成で「心理学とは何か」「知覚」「記憶」「想像」「欲望」「思考」「学習」「作業」「感情」「自我」「性格」「ことば」「社会」の各章からなっている。戦前の教科書としてはかなり要領をえた章構成になっており、章の主題もほとんどが現代の心理学概論の主題につながる構成になっている点が注目される。この主題のなかから現代に向かって、落ちていったものといえば、「欲望」「作業」「感情」といったところだが、そのひとつに「想像」もあるわけである。

もともと書物自体が小ぶりなので各章の分量は限られているが、それでも想像の章には14頁があてられている。その内容は当時の心理学テキストにおいて一般に扱われていた想像に関する記述にほぼ沿っており、順に節の項目だけをあげれば、1. 想像の特性、2. 想像の種類(1) 受動想像(再生想像)と能動想像(構成想像)、(2) 理想、(3) 空想、(4) 妄想、3. 妄想「妄想的種類」(1) 発揚性妄想、(2) 抑鬱性妄想、4. 夢(1) 発生条件、(2) 夢の特色、盲人の夢、5. 現実と非現実、6. 子供の世界、7. 原始的思考、8. 仮像の世界、という具合である。

節の構造にやや一貫性がなく、項目によっては数行の記述で終わっているところもある。それとは明記してい

ないが記述にあたっては、Titchener の見解にたびたび拠っていることがわかる。ただ、紙幅の関係もあってか、筆致にやや荒削りなところが目立つ。構想に関する言及はない。

■ 今田恵 1939 『心理学』育芳社・全 742 頁
 構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

総頁数 742 ページ、20 世紀前半、戦前に刊行された心理学概論書では最も大部であると思われる。ただ印字フォントのサイズや行間はかなり大きいので現代の基準からいえば文章量はさほどでもない。章立ては細かく、27 章に分けられている。大まかな流れとしては心理学の起源や対象、方法、測定といった導入にはじまり、動機、感動、感受、感覚、学習、知覚、表象と記憶、思考及び想像、動作や意志、自我、人格、智能、性格といった具合になっている。

ここでの関心とはやや異なるが「感動」と「感受」という主題で章立てがなされている点はこの書の特徴のひとつになっている。筆者がここでいう感動とは、動機と並んで心的活動の基底的要因で、いわく「感動とは意識体験中特に対象に指向せられず自我の状態と感ぜらるる部分」を指している。たとえば、赤い花をみて気持ちがよいと感じるとき、赤いも、気持ちがよいも主観的経験だが、その赤いと感じる方を感覚、気持ちがよいと感じる方を感動とする。前者は認識の基礎となり、後者は価値意識の基礎になると説明している。この感動の部分は心の基底的な活動なのだが、心理学ではまだ体系的な研究が進んでいないとも書いている。命名はともかくとして、筆者が感動と呼ぶ心的過程への取り組みが不足していることも、想像の過程に対するそれと同様、現代に至るまでほとんど変化していないといえよう。

「感受」については感動や動機が自我に関する心的活動であるのに対して、感受は同じく刺激を受けて生じる心的活動だが、刺激を与える対象に関連した活動の客観的側面にあたる部分であるとする。上例でいえば、赤い花をみて赤いと感じるところを感覚、赤い花の存在をみてとるところを感受として分けて考えている。

ここでの関心に戻れば、想像については「思考及び想像」の章で記述されている。それを簡単にまとめると次のようになる。想像は抽象的概念より具体的心像を内容とし、思考の現実性に対して想像は非現実的である。同じ表象でも記憶表象との違いは過去へのつながりから解かれていること、むしろ将来に向けて開かれている。

推理の結果がひとつの解に結びつくのに対して、想像は推理に似ていても可能性としての解が広がる。それは矛盾を超えることもあるが、他方で融通性に富む。想像はこうして現実には達せない目標に達することができ、制約ある現実生活を豊かにする適応行動として機能する。だが、過度に濫用されれば現実逃避、自己満足に陥り、不適応につながる。

このように述べる今田は、想像を目的をもたない夢想のような遊戯的想像と思考の一種として一定の目的を背景に、日常生活や人間文化における有形無形の発明や創造的貢献に資する生産的想像を分けている。後者には構想が多分に関係すると思われるが、これを積極的想像、あるいは制限想像とは換言するも、構想への言及はない。

■ 寺門照彦 1939 『最近心理学原論』同文館・全 303 頁
 構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

以下の 14 章構成である。「科学としての心理学の位置と役割」「行動とその場—心理学の課題」「環境の場—問題とその正しい解決」「環境の場—視覚体制とその法則」「環境の場—図形と素地、恒常」「環境の場—三次元空間と運動」「活動—反射、自己、実現運動」「活動—適応行動、構え、情緒、意志」「記憶—痕跡理論の基礎づけ、理論編」「記憶—痕跡理論の基礎づけ、実験編」「学習と記憶機能 1、2」「社会と人」「結語」

著者が序に述べているところによると、心理学はまったく新しく書き換えられるべきところにきていて、その試みとしたのがこの著作であったという。彼のいう全面的書き換えは具体的にはゲシュタルト心理学の成果を反映させたテキストの必要性ということであった。その目的を果たすべく K.Koffka の "Principles of Gestalt Psychology (1935)" に依拠して、場の理論を中心としたゲシュタルト心理学の見地にたって書かれており、個性のはっきりした概論になっている。

想像や構想についてはまとまった記述がない。ただ、「意志」を扱った章に「レヴィンの構想」という項目立てがある。この項目だけを読んでもこの名称の意味は読みとれないのだが、つぎの節も含めるとおぼろげながらこの名称に込めた意味はくみ取れそうである。そこでやや長いがあえてその 2 つの項を引用しておく。

「レヴィンの構想 有意動作ということばは少なくとも二様の文脈において用いられる。一方に衝動的及び本

能的動作に对照する意味において用いられ、他方自動的動作に对照的に用いられる。一片の肉を犬に見せて、犬がこれに飛びつく場合（衝動的又は本能的動作）にはこれを有意動作とはいわず、また自動車を避けるために人が飛びのく場合（自動的動作）にもそうはいわない。さらに定時的に着物を着たり脱いだりし、食事をしたり、学校に歩いて行ったり自動車を運転したり、丁寧な質問に対して丁寧に答えたりする等々（習慣動作）のごとく、有意的とすべきからざるかに甚だしく迷う場合もある。

これに対して意図の実現は一般に有意活動と呼ばれるが、計画的でもなく、むろん意図的でもなく自動的に喧嘩のなかに割込んで、これを引分けるごときこと、あるいは失礼な質問に対して丁寧に答える等のこともまた有意活動と見られる。これらの諸例からわれわれは、すべての動作を有意的か無意的かに画然と分類することの事実上不可能なこと、換言すれば分類原理の誤りであることを知る。

場の活動と統制的活動　かくてわれわれはそうした分類の立場を捨てて、場面における力動の機能分析から進まねばならない。レヴィンはかかる分析から出発して、「場の活動」と「統制的活動」の区別に到達した。この区別は実現運動を統制する力動に関するものであるが、活動が環境力ないしは環境-自己力によって完全に統制される場合を場の活動とし、自己力により統制される場合を統制的活動とするというごとき簡単な区別ではない。

飢えた動物の活動のごとき純粋に衝動的ないし本能的な活動と見られるものは主に自己力により統制されるが、焼けている建物の中から人を救助するごとき真の統制的活動と見らるべきものが、かえって強い環境力の支配下にある。また燃焼中の家の中にとびこんでかけ替へのない金は持たずに潰れた古帽子を持出してくるような行動は一見同じく見えて実は統制的活動ではない。

かくてレヴィンはこれを区別する根拠を自己力と場の力との葛藤におかんとする

このように文章自体、論旨が不明瞭な部分があつて必ずしも読みやすいものではないが、ここから「レヴィンの構想」と表現した理由を探るとすれば、おそらくレヴィンが動作を有意か無意かで分類するような一般的にありがちな、しかし土台無理な分析の方法をとらず、場面における自己力と場の力の力動関係を分析することで活動に接近しようとする新しい考え方をもつたため、そこにみられた企図的な性質を指して構想という表現を用いたのだと察せられる。

このように心理学のテキスト中に「構想」のことばが使われることはこの例をはじめ、ときどき認められることである。そのとき著者がなぜ、このことばを選択したのか、その心理を探ることは、この概念について心理学が何も述べていないだけに、興味深いところであると思える。

■ 黒田亮 1947『心理学概論』三省堂・全415頁
構想なし、想像あり、創造あり、図式なし

章立てはつぎのとおりである。「近代における経験心理学の発展」「心理学の対象」「心理学の課題および方法」「体験の区分」「感覚」「中枢性感覚および共感覚」「知覚」「表象および概念」「記憶」「思考」「感情および情緒」「意志」「注意」「自我」「類型」「睡眠および夢」。

戦後、間もなく出版された著作である。そのこともあつて昭和の前半までの心理学事情が色濃く反映された内容になっており、こんにちからみるとかえって新鮮な内容構成になっている。心理学概論の使命として著者の個性をなるべく控えめに、一般的な記述に努めることが大事で、それは承知のことということが何度か述べられている。それでも著者がおそらく個人的に関心をもっていたと思われる仏教的な観点が全体にわたり少しずつ染み入っており、それがこの概論書の特徴になっている。

したがって、構成は正攻法だが内容は個性的に仕上がっている。たとえば、Würzburg学派とその考え方が相対的に大きく紹介されていたり、「体験の区分」という章では東洋における体験の区分とみるべきものとして仏教心理学的な観点から、五感による五識と、それらを比較、統合、意識化する第六識、潜在的な自我である執着心からなる第七末那識、第七識までの全体を支持し統制する心の働きの源としての第八阿頼耶識（あらやしき）といった体験のありようまでが紹介されている。

構想や想像に関連しては「表象および概念」の章で想像の表象が追想による表象と比較され述べられている。この点、やや特徴的である。すなわち、追想は経験された知覚ないし表象の更新で時空が制約されるが、想像は知覚内容の変容で時空に縛られない自由性をもち、ゆえに創造的であるとしている。ただし基本的に用いている素材は同じで、それらの結合の仕方が異なるだけだという見方が披露されている。構想への言及はない。

■ 大脇義一 1948『心理学概論』培風館・全409頁
 構想なし、想像あり、創造あり、図式あり

全体は28章からなり、それらはおおよそつぎのとおりである。心理学の成立や課題、研究法などを述べたあと、環境のなかでの人間、知覚、注意、行動、意志、感情、表象と連想、記憶関連の事象、思惟と想像、夢、個性、性格形成といった流れで論じられる。

この時期の類書にはめずらしく図式について語られた部分があるが、これはDiagrammeのことで記憶形成にあたり、空間配置的に記憶材料を並べて記憶することが得意な人があるということ、その方法などを説明している。想像については「思惟と想像」の章のなかでひとつの節を設けて語っている。それ以前に「表象と連想」の章があり、その冒頭部分をまとめればつぎのようにある。

表象（観念）idea、Vorstellungは直観的に頭のなかに描かれた像（心像）image, Bildである。知覚のように外界に刺激があって感官が興奮しておくるのではなく、目前に刺激がなく感官の興奮もないのに、大脳中枢の興奮だけで喚起する体験である。だから、知覚に比べれば漠然としていて、たやすく消失する。ただ、知覚と表象のあいだに厳密な区別はなく、残像や共感覚、直観像のように両者の中間のようなものもある。表象には想起表象（記憶表象）、連想表象、想像表象、思惟表象、あるいは言語表象などがあるが、重要な精神作用において不可欠の素材となっている。だから、こうした精神作用が発達している個人ほど表象も複雑、豊富で、よく使用される、といった具合である。

その想像表象について述べたのが後の章の部分になる。その節での記述量はわずか（22行）だが、冒頭ではニュートンの重力の法則やカント・ラプラスの星雲説、あるいはダーウィンの進化論などを例にあげ、それらが論理的思惟を飛躍した創造的な直観のひらめき、大胆な想像によってもたらされたものだとして導入している。そしてつぎのようにのべている。

想像 imagination, Phantasieは連想や想起と密接で、ほとんど区別できない心的活動である。その第一の特徴は客観界とは一致しない表象世界をつくることである。第二に主体からみて自発的で、自分がつくりだした具体的生産物である。要素は過去の経験によるが生み出されたものは経験を越えた新しいものになりうる。この点が知覚や記憶と異なる。第三に個人の理想を含めた欲求全体の深部に由来する。そのため個人的な徴候を帯びる。また、その内容はストレートな欲求のあらわれではなく

変形を受けうるので象徴的な意味をもつこともある。その最も端的なものが夢である。

といった具合で、想像の積極的な役割を前面にとらえた相応に冷静かつオリジナリティのある記述となっている。この想像の節のあとに「創造過程と創造人」という節がつづいている。その「創造過程と創造人」の節に述べられている創造的想像は多分に構想と重ねてみることができそうな記述になっている。その部分をまとめるとつぎのごとくである。

創造過程は創造力に負うところが大きい。新しい着想 Einfall とか直観または直覚 Intuition、インスピレーション Inspiration といわれるのは本人にとっては受動的で、あたかも天来の妙想がふとあらわれるようなものである。こうした偶然的、無意識的なものはP.Pluntが指摘するように創造的想像の本質を検討するにあたり心理学的な分析にとって得るところが少ないだろう。それよりも創造的想像の駆動力として情緒的、衝動的、欲求的な要素を看過できない。同時に思惟、創造的な推考と熟慮もこの想像では共に働いている。Pluntは著名作家や学者の自伝的回答から創造過程にこうした興奮的思惟の特徴を見いだしている。

といった具合である。ただし、構想に対する言及はない。

■ 久保良英 1948『心理学要論』目黒書店・全242頁
 構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

章立ては22章構成で細かい。「行動の発達」「環境の力」にはじまり、「知能」「記憶」「学習」「作業」といった具合に進み、「情緒」や「知覚」を扱って「言語」や「概念」、さらには「個性」「自我と社会」、「国民性と国民文化」といったユニークな章も設けている。

「想像」については章として設定されている。想像の表象は記憶とは異なって新しい組織をなしている。だが実際、両者のあいだの差異は明瞭ではないとする。想像には二種類あり、ひとつは遊戯的で目的のない晝夢（自分の希求する状態を思い描いて楽しんだり、反対に起きていない災難を思い描き煩うことなど）、あるいは夢などの勝手気ままな自由想像、もう一種類は日常生活においてはいうにおよばず、科学、芸術、宗教などの営みにおいて一定の目的をもち、生産的な役割を果たしている制約想像（発動想像）である。たとえば、自然科学にあっては事実の外に出てはならないとはいえ、疑問に発

して研究を進めるにあたりその順序や用いる手段や道具を考えていく過程や、発明・発見もすべてが偶然によるものでない。だから、まず事前に何らかの想像があつてのことだろうという。文学にあつてはそのほとんどすべてがこの想像の産物で、その典型として Dante 『神曲』の世界をあげる。また、宗教においても真・善・美の融合した理想の境地は世界のさまざまな宗教において多様な名称をもって描かれているが、これもまた大なる想像の産物であると。このようにここで語られている制約想像はいずれも「構想」というべきことさらに重なるが、そのことばは用いられていない。

■ 安倍三郎 1949 『心理学概論』 福村書店・全 459 頁

構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

総論と各論の二編構成で、前者では「心理学の対象」「心理学の方法」「現代心理学の部門」の各章、後者には「行動一般」「知覚行動」「錯覚、幻覚、共感覚、直観像」「表象」「思惟または思考」「感情(情動)」「意志体系」「自我と人格」「個性・性格」「知能」の各章が立てられている

ここでの関心はとりわけ「表象」の章に書かれた「想像表象」の節である。

安倍によれば、表象は記憶または想像により、再生あるいはつくりだされた心像である。表象は行動面では過去の経験と未来への計画をつなぐ現在意識のもとにある行動を説明し、その後の行動を予測することに重なっているとす。とくに行動にかかわる表象の説明のなかでは「心構え」についてドイツ語の Einstellung を添えて次のように説明している。

「個性に応じ、階級に応じ、教養に応じ、境遇に応じ、知らず識らず準備している主観的な態度である。Ach は固執傾向も決定傾向もひとつの心構えだとみている」20 世紀前半末に書かれた著書であることを反映してその世紀初頭に頭角をあらわした Würzburg 学派の Ach の見方が導入されている。

構想ということばは言及されないが、行動面での構想にかかわるところが触れられているといえるだろう。

「想像表象」の節では「想像(imagination)」を「過去の経験を材料にして未知のものであるとの信念を伴う新しい表象を構成する働き、あるいはその働きによって形成された像」と定義する。記憶表象にも幾分か想像が入り込むものだから、本来、記憶表象と想像表象を区

別することは困難だが、あえてその差異をとらえるとするれば、想像には常に「未知」のもの、将来のことという信念がつきまとい「新奇」の感情が伴い、加えて現実には制約されないとしている、

また、他人の話や小説などから未知のことがらを思いめぐらせる受動想像と、経験をさまざまに組み合わせて新たな創作にむすびつけていく際の能動想像に分けみる見方があるが、両者は画然と区別できるものではないし、能動想像はほとんど思惟・思考と重なってくとする。あえて差をいえば、思惟は抽象的な表象(概念)において、想像は具体的な表象をもとにおこなわれるとする。

■ 正木正 1949 『改訂心理学』 壮文社・全 311 頁

構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

篇立てはつぎのとおりである。「精神生活の現実的構造」ここでは行動と環境、心身問題、意識、習慣などが扱われる。「精神生活の分節的構造」では感情、知覚、表象、記憶、想像、思考、意志などが扱われる。「精神生活の類型的構造」では知能、気質、性格が扱われ、「精神生活の文化心理的構造」では自我意識、言語、個人と社会、世界観といったテーマが扱われている。

ここでの関心に沿えば、「精神生活の分節的構造」で想像が項目立てされていることが注目できる。その概要は次のとおりである。

想像と記憶はともに同じ表象である。だが想像では記憶よりも自我が一層自由に活動し、欲望や希望に沿った表象が展開される。想像は現実生活の内容を豊富にもするし、ときには現実世界からの逃避や超越をもたらす。また、現実世界の隠れた意味を発見したり、新しい世界を創造したりする。その機能からつぎのような分類ができる。

- (1) 記憶を補完する想像。これは現実的には記憶そのものと分ちがたい想像である。
- (2) 空想や幻想。現実世界からの逃避や超越としてある。一見、無駄な営みのようにみえるが、現実には防衛機制として精神の安定をはかることに寄与している面がある。しかし、自我が現実との関係を失うかたちでこれが亢進した状態では妄想となり病的な次元に入る。なお、妄想については 20 世紀半ばころまで特徴的にみられた貧困、化身、獣化、憑依などを含む細かな妄想分類を提示している。
- (3) 創造的想像。潜んでいる意味を洞察し表現しよう

とする機能がある。したがって、既存の表象の新しい結合を探ることだけでなく、意味の発見を本分とし、本質や理想の追求、ものごとの普遍化に向けての活動が営まれる。これによって芸術、宗教、科学の諸活動が可能になるわけで、文化にとって重要な役割を果たしている。この創造的想像により自我はもっとも深い、純粋な自由な活動をなするのであり、わたしたちの精神生活は一層の進展をなす。

(4) 知識の発展段階としての想像。想像は普遍的な意味を個物において把握し、表現するものである。だから、個物から普遍への橋渡しをするものとして知識の発展段階に位置づけられる。わたしたちの精神生活は記憶と想像により内容を豊かにし、過去と未来を現在のうちに包含させ、同一性をもって持続的に発展させていく。なお、(3)と(4)の想像は本稿でいう構想力と重なるところが多いのだが、構想ということばへの言及はない。

20世紀の半ば、戦後の心理学にあつて、このように精神生活、こころの働きにとっての想像の積極的な役割を捉え、明言していたことには少なからぬ驚きを感じる。だが、この後20世紀後半の心理学は実験室研究中心に傾き、勢いそれに馴染む研究が主体を占めていった。その結果、この流れを精緻、発展させていく道筋を欠いてしまった。

■ 正木正 1949『心理学通論』大明堂書店・全194頁
構想なし、想像あり、創造なし、図式あり

太平洋戦争の敗戦を経て、戦後復興が進む最中に出版されたこのテキストは著者による前項の『改訂心理学』と同年に出されたものだが、こちらは冒頭に人づくりを主眼としてつくられるにいたった新制大学の教養課程で使うのに適した教科書というスタンスで書かれたことが明記されている。その新しさをあらわすように章構成やタイトルは口語的でアクセスしやすい印象になっている。ただし、本文に入ると、記述の仕方は堅めで、とりたてて斬新さは感じられない。

大きく5章構成で、はじめに「精神はどんな機能をもっているか」として感性、知性、動機、意志、感情、情念について語る。つぎに「精神はどんな発達をするか」で発達をテーマに語るが、ここでは文化意識の発展も論じている。「精神は身体および環境とどんな関係にあるか」では心身関係を客体、主体的両観点から語っている。4章「個性はどんな成り立ちをもっているか」では知能や

気質、性格、自我について語り、最後に「社会はどんな心理構造をもっているか」として集団や社会的役割が論じられている。

高等な精神作用の要素として記憶、想像、思考があるとき、これらの作用の可能性を知性と呼ぶという記述はある。だが、このテキストではとくに章や節を設けるかたちで想像や思考について説明はせず、知性という枠組みにおいて短く扱うにとどまっている。ちなみに創造的想像についてはやや強調的に述べているので、多分にDeweyの見解に沿ったものと思われるが、その部分を引用しておく。

「創造的想像は所与の個別的形態のなかに普遍的意味(美、摂理、善)などを発見し、それを表現する内的の活動であり、知性としてはきわめて価値高き機能である。これより価値の発見が可能になり、芸術、科学、倫理、宗教のごとき文化的精神機能の枢要の作用をなすものである。美の創造、啓示の感得、原理の発見にはかかる想像作用が根源的に働いている」

なお、構想への言及はない。

■ Rubinshtein, S.L. 1946 *Osnovy obshchei psikhologii*. С.Л. Рубинштейн, Основы общей Психологии. Издание Второе, Государственное Учебно-педагогическое Издательство, Москв,
吉田章宏訳者代表『一般心理学の基礎 I~IV』明治図書出版 1982.

構想あり、想像あり、創造あり、図式あり

20世紀前半にソビエト心理学の基礎を築き、学界を牽引した一人、Sergei Leonidovich Rubinshteinの著した教科書である。当資料では翻訳書を含めない方針だが、本書については訳者に負うところが大きいわけだが、「構想」という訳がなされ、しかも著者自身の記述にもとづき「想像」とは訳し分けられていることから、本項の趣旨からしても例外として載せる意義があると判断した。

本書は全5部20章からなる大部の原書で、それを4巻構成の訳書で訳出している。その全章題は次のとおりである。「心理学の対象」「心理学の諸方法」「心理学の歴史」「心理学における発達の問題」「動物の行動と心理の発達」「人間の意識」「感覚と知覚」「記憶」「想像」「思考」「言語行為」「注意」「情動」「意志」「行為」「活動」「人

格の志向性」「才能」「気質と性格」「人間の自己意識と生き方」。

20世紀半ばのロシアにおける心理学研究と教育の様子がよくうかがえるテキストである。欧米のテキストに比較して、思考や言語行為の章などで特に内容の厚みを感じ取れる。一見して定番の「学習」の章がないことに気づくが、これは労働の話題とともに「活動」の章で扱われている。章立てをみるかぎりオーソドックスな教科書だが、記述の内容はどنگりの背比べ的なテキストが多いなかにあつては、個性的で学ぶところが多い。

想像については一章を割り当て、種々の想像のありかたなどを詳しく論じている。特筆すべきはその「想像」とは別に「構想」についてまとまった記述があることである。これはロシア語 замысел の訳になっている。言及されている箇所は「情動」の章で、情動と活動の関係を論じるなかでつぎのように語られている。

労働とあそびを比較したとき、あそびでは行為の目的や達成よりも、その過程における情動体験に重点がおかれている。つまり、あそびではどのような成果が得られるかとか、何のためになるか、といった目的観点でとらえて、満足なり緊張なり興奮を感じるということはない。あそんでいるその最中に満足なり緊張なり興奮（満足一不満足、緊張一弛緩、興奮一沈静は W.Wundt が指摘した感情の三次元である）を感じ、その情動体験に意義を見いだす。あそびと対置される仕事ではとくに複雑な活動にあつては、構想、計画の仕上げ、実行といった異なる過程の組み合わせでできている。その構想段階では、あそびと同様にそのプロセスにおける情動体験が意味をなす。たとえば、作家や研究者、芸術家の活動をみると、

「作品の構想を練るときが、特に情動的に――かれのそれにひとつづく綿密な実行よりも強烈に――体験されることがある。まさに構想をねるはじめの時期にはきわめて緊張した創造的な喜びを味わうことが多い」

という。また、関連して K.Bühler が人間の発達の過程を追っていくと、積極的な情動の発生が徐々に行為の完了時からはじめの方に移行してくると語っていることにも触れ、精神の成長とともに活動の性格や構造の変化があることを指摘している。つまり、ただ行為をし、結果を云々することよりもむしろ行為の前におこなう計画が、そして計画よりもそれ以前の構想が活動全体における意義を増し、重視されてくる。それは幾多の活動経験を経たのちに生じてくることであり、しかもその結果として先取、先覚という先読みの認識ができるような心的成長を果したのちの、いわば大人の精神の特性とし

て現れるものだという。

この考察では構想の過程そのものを分析しているわけではない。しかし、仕事における構想の段階の性質が結果よりも過程における情動体験に意義を見いだすあそびのプロセスと類同の関係にあることを指摘し、人間の発達過程において子ども時代のあそびの機能が成長した精神では仕事のはじめの構想段階に埋め込まれて存続するというユニークかつ鋭い見解を提示している点で学ぶべきところが大きい。

■ 武政太郎 1949 『心理学』教育科学社・全353頁 構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

15章立てで心理学の課題や問題、観点や方法などを述べた後に、行動を衝動、情緒、知覚、思考の側面から説明し、適応や情操という観点からかためて意志を、行動効果の残存と発展という観点から記憶や学習を、さらに社会生活のなかでの人として集団や人格を、最後に心理学の定義や対象をめぐってのいくつかの学説をまとめている。

構想や想像に関する章や節はなく、概観したかぎりでは想像への言及は1箇所程度、構想の言及は見あたらない。「思考的行動」と題された章では、思考とはなにかを説明するのに、飛行機の轟音らしきものを聞いて、ただちに防空壕に逃げ込むような事態という例をあげている。さすがに時代的である。この場合、明確にそれと知覚しているのではないし、視覚的に確かめていないのだから、知覚的な判断による行動とは別で、これを思考による行動と呼ぶのだと説明している。もうひとつの例として、いまここに一郎、二郎、三郎がいて並んで腰掛けているとする。さて、真ん中に腰掛けてるのは誰か、という問いを発したとき、二郎ではないかと答えることがあるかもしれないが、それは目でみて確かめているわけではなく、この記述のかぎりでの推断によるものだから、これもまさに思考的行動なのだとして述べている。これらはいずれもまさに想像による推測の例でもあるわけだが、この書では想像としての説明はなされず「あたかも具体的な場面を眼で見るかのように」して判断している具体的思考と呼んで、抽象的思考との区別を強調している。

その少しあとで、Wundt が心像で考えるのは想像で、概念で考えるのが思考だと述べたが、果たして心像と概念は別のものかという疑問を呈し、知覚に依拠した心像のことをいうのであれば、それは具象概念のことだろう

としている。武政のように頑として想像ということばを使わずに済ませようとする傾向は「第一部 想像編」の研究史でも確認したように、戦後の心理学の風潮になっていく。これはその第一陣だったといえようか。

■ 戸川行男・本明寛 1949『心理学』警醒社書店・全352頁

構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

章立てはつぎのとおりである。「心理学の研究法」「行動と環境」「認識（知覚や慣れが語られる）」「経験的事実（痕跡や再生、表象ということばで記憶が語られる）」「自己体験と感情」「要求と実現行動（学習が扱われる）」「作業（実用場面での学習が語られる）」「発達と類型」「社会と個人」「異常心理」「心理学の立場（種々の心理学派の解説）」である。

注意を引く章・節立てとして「認識」の章の「向き」と「構え」の節があるが、知覚が個人の生活行動上の「向き」やそのときどきの構えによって影響を受けるという説明で、構想までの言及はない。

「経験的事実」の章の「表象体験」では、表象体験とはすなわち「思い浮かべられたこと」であるとして説明している。その表象体験には対応している外界の刺激がないので漠然とした模型の特徴を帯びてあり、知覚体験に比べれば迫力に欠けるが、場所を選ばず、重ね合わせたり、内容を改変できる自在性があるとしている。これは普通は記憶表象のことをいっているが、想像や思考によるものもあるとする。この言及からこの記憶と想像と思考の根本的な違いが興味深いところなのだが、概論書ということもあろうか、踏み込んでいない。また、表象体験には「～しようと思う」といった具合に意志が伴われることがたびたびあるとしている、このことから行動のプランニングについて入口をかすめていて興味深い、これもそれ以上のところには立ち入っていない。

■ 城戸幡太郎 1950『現代心理学—その問題史的考察』評論社・全286頁

構想言及あり、想像わずかにあり、創造あり、図式あり

「哲学的人間学と精神科学」「精神科学と心理学」「心理学と性格学」という3つの括りのもとで10章前後の章ごとに哲学、社会学を含めた広範な領域の学説における視点や関係をまとめ、結論として「人間学としての心

理学の問題」を加えている。したがって、全体のつくりは通例の教科書とは異なりユニークである。だが、扱った理論の幅と量に比較してテキストの分量が限られていたためか、かなり多くのことがらに触れてはいるのだが項目一覧に近くなっていて、このテキスト自体からその個々のことがらについて知ることはもちろん、体系的に内容を理解することはかなり困難なつくりになっている。

序においてこのテキストが1932年に著者が刊行した『現代心理学の主要問題』の発展的な改訂版であることが紹介されている。そのなかで「大体の構想は初版（前著）とかわらないが」と記されている。著者が構想という営みを実践的に意識していることは明白である。

ただし、本文内容では構想力への言及が「想像力」の訳をもって一箇所わずかに認められるだけである。つぎのとおりである。

「イェンツは……略……ハイデッゲルが問題としたカントの想像力（Einbildungskraft）の如きはイェンツのアイデティークの問題から解決されるべきであるといっている」

このイェンツとは Erieh Rudolf Jaensch のことで表象と記憶像のあいだにあるとした主観的直観像（Eidetiker アイデティークル）の研究をもとに人間の構造類型学、さらには日常の教育実践にも結びつけようとする精神技術学を導いたことで知られる実験現象学の学者である。その著名さはとくに彼の類型学がナチスが主張した人種類型に結びついた点にもある。アイデティーク（Eidetik）とはその主観的直観像に関する彼の学説のことをいう。したがって、これはフッサールの用語でいう形相学（アイデティーク（Eidetik））とは異なる。

このようであるから、構想力への言及はあるものの、それを説明しているわけではない。想像や創造についても同様で、ごく部分的にそれらの概念が学説のなかで検討されたことが触れられるが、まとまった説明はなされていない。

■ 矢田部達郎 1950『心理学序説』創元社・全437頁

構想なし、想像なし、創造なし、図式 0.Selz の予見図式としてあり

大きく独特の括りによる全3章構成になっており、行動や意識の行動を扱った「精神形態学」、情意、感情、

あるいは知覚、記憶、思考で分けた知的生活の法則からなる「精神生理学」、個性や環境、社会、発達をテーマにした「精神生態学」からなる。

この構成からしてわかるように序説・概論書という立場をとりつつも著者の個性や独創性が前面に出ている。文章も全編にわたり著者特有の筆致で個性的な考想が展開されている。だが、構想や想像に関する明確な記述は見当たらない。

なお、『日本の心理学』(1982)の「わが国心理学界の諸先達」の章の矢田部の項を担当した園原太郎は、この著作に関してつぎのように評している。正直なところ意外に感じたこともあり、参考までにあげておく。「平衡維持の法則を一般原理とし、その中で手段体系としての知性の活動を代表的選択の組織として統一的に把握するというきわめてユニークな行動原理を展開したもので、聴講者に深い感銘を呼び起こしたのみならず(普通講義として講じられた心理学体系をベースにした著作であった)、心理学の体系的思想として不滅の感動を学界に起こした」。

■ 小保内虎夫 1950『人間科学としての心理学』世界社 全247頁
構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

大部の著作ではないが36の細かな章立てで構成している。ユニークな章も目立つのでそのすべてを記せば、つぎのとおりである。「心理学の対象と方法」「人間の生涯」「行動の推進力」「知能行動」「行動の適応」「行動の神経的並びに力学的基礎」「人物の姿態」「性格診断と態度測定」「知能検査」「遺伝と環境」「精神作業」「感性一般：その1 感覚」「感性一般：その2 感覚続き」「単純感情」「知覚」「ゲシュタルトと感応」「形態感情」「知性一般：記憶」「記憶の諸相」「心像」「意味・象徴・詩美」「思考」「注意」「意志」「自己」「社会と個人」「社会化」「社会の心理的基礎」「政治」「経済」「職業と階級」「教育」「科学」「芸術」「宗教」「道徳」。

他のテキストにはみられない章が散見されるが、想像を独立して扱った章はない。想像については「心像」の章で想像心像という節で説明されている。いわく想像とは心像を思い浮かべることだが、再生のそれと異なるのは、再生が過去の経験そのままを思い浮かべられるのに対して、想像では新しいものが付け加わる点が異なっているとす。とはいえ、再生でも経験そのままとはかぎらないから、結局、再生と想像は程度の差であるとも追

記されている。

この書きぶりは他のテキストでもしばしば登場する。再生を記録の読み出しを基点に考えると、人間の記憶に戻るかぎり、どうしてもこういう記述にならざるをえない。記憶は心像をベースにした想像にほかならないということから出発すれば、違うものだが結局は同じという矛盾に陥らずに済むのだが、こだわりは強い。

この節で小保内はいわゆる一つの曖昧図形を載せており(Fig.1)、その図の理解にあたり、「野球打者の姿」という解釈を与えるとたちどころに、それまで曖昧だった図にありありと打者の姿が浮かぶであろうと書いている。まさにその通りで、他に見かけない図であるだけに(おそらく著者のオリジナルであろう)、意図していることが読めているとしてもあらためて新鮮な驚きがある。

小保内はこれが可能となるのはまさに想像の働きゆえなのだ、としている。むろんこれが可能になるには過去に野球打者の姿をみた経験が不可欠だと語る。その証拠に図を逆さにしたら、それと認めることができないという。これはことば足らずで、一度、それとわかれば逆さにしても認めることができないことはない。ただ、難しくなることはまちがいない。また、最初にこの図を逆さまにしていたら、野球打者という手がかりが与えられてもそれとは了解できないだろう。そのことを確認する



Fig. 1 小保内虎夫 1950『人間科学としての心理学』世界社に載っていた図。

ために、ここでは著者のその図を借りて載せたが、著者の著作とは違ってあえて上下逆さまに載せた。だから、読者はおそらく図をみてそこに野球打者を認めることはできなかったか、むずかしかっただろう。いまここで本稿を逆さまにしてその図をあらためてみてみれば、今度こそ打者が浮かびあがってくるのではないだろうか。

このプロセスには小保内がいうように確かに過去の経験が必要であり、ゆえに再生心像がかかわっていることはまちがいない。だが、その経験とか再生心像はここで浮かび上がった打者そのものの形態であるはずはない。打者の誰であつてもよいのだから、実際は誰でもない打者がベースに立ってバットを構えている心像である。だが、それは個々の事象から一般化されユニバーサルに流用可能となっている心像があつて、それが再生的に照合されているということでもありそうにない。むしろ、ベースに立ってバットを構えた野球打者を繰り返し見た経験によってできているかなり漠然とたゆたっている像といったところだろう。それがこの白黒二値の図の感覚経験に焚きつけられ、あるいはガイドされることで打者の姿として成形されるのだろうが、そこには単に再生的な想像だけでなく、新たなかたちを創り出す再生とは異なる想像作用も当たり前にも働いていることは明白である。

■ 今田恵 1952『心理学』岩波書店・全516頁
構想文章上の記述としてあり、想像あり、創造なし、図式なし

敗戦前(1939)に育芳社から刊行された同著者の『心理学』にそつて、改訂新版という趣をもつて書かれたテキストである。したがつて、章構成は基本的に前著を踏襲している。ただし、前著で異彩を放っていた「感動」の章は姿を消し「感情及び情緒」の章に代わっている。とはいえ、そのなかで依然、節として affection の英単語を付して「感動」が説明されている。

ここでの関心にそくしていえば、この書には「構想」のことばが1箇所見いだせる。心理学の対象を論じている章で、前著にはなかった心理学の科学的性格について述べた節において、つぎのようにある。

「科学の基礎は、経験を把握する道具となる構想(Construct)としての概念(Concept)である。その概念は任意の構成物でなく、実験的操作によって規定しうる概念でなければならぬ」

このように Construct とわざわざ英単語を付しているよ

うに、ふつうであればそのあとに記されている「構成物」「構成体」とでも書くところだろうが、その無機性を嫌つてか、経験把握のための心的な要素として「想」の文字を含んだ構想を選んだようなニュアンスが伝わってくる。ただし、これはただこれだけのことで、構想という営みを心理学の対象として捉えて語っているわけではない。

想像の記述は前著同様、「思考及び想像」のなかで比較的スペースを割いて記述しているが、その内容はほとんど前著と変化していない。

■ 望月衛 1954『一般心理学』要書房・全224頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

13章構成からなり、その章題を追えば「心理学とは」「反応」「成長と発達」「欲求充足の行動」「個性と適応」「感情と情緒」「環境の認識」「学習と訓練」「記憶と忘却」「思考」「知能と適性」「産業能率」「社会行動」という具合である。

あとがきには米国のテキストに範をとつて書いたと述べられているが、それだけに戦前の教科書の名残をうけたような章題はなく、20世紀後半の典型的な心理学概論の原型的な章構成をなしている。ただし、範としたのは章構成だけのようで、内容は決して翻訳調ではなく、全体にわたつて著者自身の考案にもとづいた平易なことばによつて書かれている。

思考の章では思考の道具として知覚、再生とともに想像をあげているが、想像についての説明はおこなっていない。構想への言及もない。

■ 依田新 1954『改訂心理学』形成社・全169頁
構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

筆者自身の紹介によれば、本書は著者が戦前に東京高等師範学校でおこなっていた心理学の入門講義に依拠して書かれた教科書で、ゲシュタルト心理学の成果を主軸に、当時の他の心理学教科書で扱われるようになった内容から選択的に補つて書いたとされている。コンパクトなテキストで、活字の大きさや行間もゆとりをもっているから10章構成であるが、内容はかなり圧縮されている。章題は「心理学の対象と方法」「行動と環境」「環境の認識」「自己体制」「場における行動」「作業」「行動の発展」「社会的行動」「性格」「発達」である。記憶や

思考については「行動の発展」の章で解説されている。思考に関しては Köhler のチンパンジーの実験などを例に問題解決の過程として簡単に触れられると留まっている。想像や構想については語られていない。

■ 宮城音彌編 1955『現代心理学 4 人間性の心理学』河出書房・全 321 頁
 構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

20 世紀半ばに河出書房から出版された現代心理学シリーズ全 6 巻は心理学分野でのシリーズものでは広範な領域にわたってユニークな編成をしていた。その各巻タイトルはつぎのごとくであった。「生命と精神（の心理学：以下省略）」「意識と行動」「人間形成」「人間性」「社会と文化」「政治と経済」。しかも当時の第一線の研究者が執筆にあたっているため、総じて内容も豊かでしっかりしている。そのなかで、想像や構想関連の話題に最も近い巻は『人間性の心理学』と題されたこの第 4 巻である。

この巻は 10 名の共著で以下の 7 章からなっている。性格を扱った「人間の構造」、適応や神経症を扱った「人間の危機」、衝動や感情を内容とする「人間の体験」、表情から筆跡、手相なども扱った「人間の表現」、天才や発明・発見、夢や空想を扱った「人間の創作」「人間の異常」、精神療法を扱った「人間の変革」。

ここでの関心は第 8 章の「人間の創作」である。たとえばそこで我妻洋が執筆を担当している「夢・空想」の節では知覚や記憶を筆頭にわたしたちのこころの働きは外界に規定された極から、欲求に支配された極のさまざまな中間において形成されることを述べ、そうした働きによってこころに形成されるのがイメージであるというおさえかたをしている。ただし、そのイメージ形成のこころの働きが想像や構想であるといった書き方はせずに、ゲシュタルト心理学の観点を導入して K.Lewin の欲求と場の理論での説明を引用してまとめている。

■ 千輪浩監修 1957『心理学』誠信書房・全 232 頁
 構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

章立ては 25 章構成で細かい。「心理学とは何か」の章のあと、「性格」から入り「知能」の章を経たのちに「知覚」の章に進む構成がユニークである。本書が 14 名の共著であることから、編集上の妙というところだろう。

そのあと「欲求」や「感情・情緒」と進み、「学習」「記憶」となり、つぎに「思考・想像・夢」という章に入る。比較的薄い教科書だが、20 世紀半ばの時点では「想像」が章の名称として留まり、まだ心理学の考察対象としての存在感があったことを伝えている。

ただし、その章での「想像」に対する記述は章の名称に掲げられていることからすると貧弱であり、行数にして 12 行で終わっている。その内容は思考に対して想像・空想は課題状況においては相対的には非合理的な解決であるとし、想像と空想を分ければ前者は思考に近く、後者は現実逃避としてあらわれたり、勝手に問題解決ができたことになったりするから夢に近い、という具合に終わっている。

このテキストは 1961 年に改訂版が出て執筆をやや増やし、構成を保ちつつ主として内容面で全般的な見直しをしている。「思考・想像・夢」の章は維持され、想像の扱いもほとんど変化しなかった。

■ 乾孝・高木正孝 1957『心理学』青木書店・全 232 頁
 構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

8 章構成で「展開」として歴史と学派について、「対象と方法」「心理現象の発生と発達」「行動の発達」「外界の反映」として感覚や知覚、錯覚など、「内界の反映」として感情、意志、記憶、「内・外の総合」として眠りと夢、思考、集団、「人格形成」となっている。

想像については「内・外の総合」と題した章のなかの「眠りと夢」の節で「想像とは、(白昼夢)より目的意識的な表象像の操作を意味している」というかきだしではじまる段落に述べられている。ただし、著者たちのいう表象とは「知覚ほどの現実感はなく、より一般的であり、浮動的である」ということであり、「表象が現実そのままの迫力をもって迫るとき、幻覚と呼ばれる」としているから、表象は心像の換言となっている。

構想に対する言及はない。

■ 桂広介 1957『心理学入門』金子書房・全 231 頁
 構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

次の 8 章構成でなっている。目的、目標、意図の実現、その中断や葛藤などを扱った「欲望」、Freud の防衛機制を中心に扱った「行動の機制」、児童の心的世界や呪

術的な原始的心性から知覚まで扱った「環境の認識」、道具の使用や学習、知能などを扱った「課題の解決」、「記憶と想像」、「感情」、「性格の形成」、「社会集団」。

章を構成している節の内容は他書にみられないユニークな項目がしばしば認められる。「心理学が人間の生き生きとした生活行動の研究を中心対象とする科学たるべきこと」という著者の想いが少なくとも構成のうえでは反映されている個性的なテキストのひとつである。

構想への言及はないが、想像については「記憶と想像」の章を設けて夢や妄想までを含めて相対的に大きく扱っている。著者は20年前に著した『心理学通論』でも想像に一章を設けていたが、ここでは記憶と抱き合わせにしている。想像の結果生じた表象を想像表象というが、記憶表象といえども過去の印象そのものの再生ではなく、必ず変容しているから、記憶表象と想像表象に厳密な区別はつけないとし、同じ章のなかで両者を扱ったゆえんを暗に伝えている。想像の説明に関しては過去の記述の整理の範囲に落ち着いている。

■ 中村秀 1957『心理学』朝倉書店・全366頁
構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

全10章構成でそれらはつぎのとおりである。歴史や学派、対象領域を述べた「心理学とは何か」「行動の力学」として葛藤や適応の機制について、「個性」として人格や知能、運動や空間、時間の知覚を扱った「知覚」「感性」として個別の感覚知覚、「記憶」「想像および思考」「学習」「感情・情緒」「意志」。

五感のように特定の感覚器官に依拠した知覚を感性という括りのもとにおいて記述しているあたりは独特である。そのわけについてとくにこだわりの記述は見あたらない。「想像および思考」の章における想像の扱いは、「想像と夢」という一節においてのみである。想像の特性として非現実性、自発性（単なる記憶の再生ではないという意味）、未来性、融通性をあげ、想像活動は自由想像と生産的な制約想像にわけてみる事ができるとして、その説明をしている。これらは戦前の今田寛のテキストあたりにはじまる想像の特性記述や類別の記述に沿ったものである。制約想像についてはいわゆる創造の段階過程として知られる準備、発酵、靈感、確証と仕上げのプロセスの説明と組み合わせながら端的にまとめている。典型的な教科書記述に徹していて内容に独自性はない。制約想像は構想に重なるところが多いと

思われるが、構想への言及はない。

■ 盛永四郎 1964『一般心理学』明玄書房・全185頁
構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

本文170ページほどの薄い教科書だが「概論として心理学の方法論」「行動の動機」「感情・情緒」「知覚」「学習」「記憶」「思考と想像」といった20世紀半ばの実験心理学の基本的なところをおさえ、概念の説明を中心に記述している。コンパクトなテキストながら、章立てのなかに「思考と想像」をおいている。その想像に関する記述は1ページほどにすぎないが、要約すれば次の通りである。

「想像は思考と同じく象徴的活動だが、思考が現実結びついた象徴的活動であるのに対し、想像は現実的制約から自由である。したがって思考では問題解決が困難か不可能でも想像では容易になしとげられうる。また、現実的制約から自由であることは、人生にとっての大きな意味がある。たとえば、現実の苦悩が想像の世界では癒やされる。行きづまった思索は想像の翼に乗って前へ進める。創造が現実の古い型を破って新しい形態を作り出すことだとすれば、それは想像において現実の思考よりはるかに容易になしとげられる。発明や発見が想像により導かれることが多いのはこのためである。しかしいずれにしても想像は仮の道を開くだけである。真の問題解決には結局、思考によって現実的に解決される必要がある」

■ 宮田義雄 1966『心理学序説』前野書店 全300頁
構想なし、想像あり、創造なし、図式なし

次の11章で構成されている。「現代心理学の展望」「精神発達」「知覚」「行動」「感情」「学習」「記憶」「思考」「作業」「知能」「性格」。章題のシンプルさからも察せられるように、内容記述もそれぞれの領域での諸概念の分類や説明が淡々となされている。

想像については記憶の章のなかで「再生の型」という節を設けて簡単に触れている。すなわち、刺激なしに頭でつくられた表象のうち、過去の経験を内容とするものを記憶表象といい、未来のことや超現実的なことがらを内容とするものを想像表象という、と述べている。

これは他書でもしばしばみられる説明なわけだが、こ

れによると、今しがた想像した未来のことや超現実的なことがらの表象を思い起こすとき、それは過去の経験の内容だから、記憶表象ということになるのだろう。だが、その表象自体は果たして想像表象から別の記憶表象なるものへ変わったのだろうか。やはり、記憶表象の大方は条件付きの想像表象にほかならず、たとえ知覚した内容の記憶表象であるとしても、その知覚自体が想像に依拠して成立していることからすれば、ここでいう表象すなわち心像は大きくは想像に含まれることになるはずである。

■ 八木冕編 1967『心理学Ⅰ』培風館・全368頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

「編者はしがき」によると、本書は心理学が学問として確立し、日本の大学でも例外なく教養科目のひとつとして定着するようになった1960年において、海外のテキストに比較した場合、日本の概論書は数こそ多くなったものの、内容は悄然としたものに留まっている観があり、この状態を危惧し、こなせるかどうかは別として、いわゆる分厚いテキストがひとつくらいあってもよいはずだ、という観点で執筆されたという。その結果としてB5版3巻構成のテキストに仕上がっている。その第一巻は「心理学の定義」「行動の生理学的背景」「知覚」「学習と記憶」「思考」の5章構成、12名の共著となっている。全体のトーンは20世紀前半の哲学的な観点はきれいに消えており、行動科学と生理心理学の影響が明確で、操作主義的、機械論的観点で整序されている。情報処理論的な認知心理学の観点が導入される直前の形式に落ち着いているため、史的にはその段階での心理学の中心的な思考規範が要領よく映し出されていておもしろいところである。

そうしたテキストだけに「思考」の章でもそれ以外の箇所でも構想はおろか想像についても触れられていない。「思考」で扱われている主たる話題は問題解決と概念の構造と形成である。新行動主義のなかから芽生えた観もある概念形成の話題は構想と多分に関連するところだが、そうした方向での解釈はこのテキストだけの事情ではなく、このあとに続いたテキストでもなされることはなかった。

■ 相良守次 1968『心理学概論』岩波書店・全439頁

構想あり（想像の換言として）、想像あり、創造あり、図式なし

章立ては細かく全30章からなる概論書で、細かなエピソードを含めて著者自身のことばを使って書かれ、話題に接近しやすく配慮された概論になっている。章構成の大まかな流れを追えば、心理学とは何か、研究法を導入として、発達、知能、性格、欲求、適応行動、感情と情動、想像と夢、学習、感覚・知覚、記憶、社会心理、性格検査、異常、人間工学という具合である。

想像については「想像と夢」と題する章で扱っている。想像はI.Kant以前はあまり熱心に研究されておらず、むしろ虚偽や誤りの源泉とみられていた。それがKantが「構想力」に積極的な役割を認めて以降、想像は創造の概念と結びついて意義があたえられ、研究の対象になったという簡単な経緯のまとめから入っている。Kant以前には想像が研究対象になったことはほとんどなかったというのは、あきらかに言い過ぎであるが、Kantが対象と認識の関係にコペルニクスの転回をなして、その転回の梃子のひとつとして構想力にこだわったことが、少なくとも初期の実験心理学において主題の定番に想像が据えられた理由になったという見方はおそらくそのとおりであろう。その証左のひとつとして心理学初期の想像論議ではKant的な再生と産出の想像（構想）の類別がしばしば登場したわけである。

多くの見解と同様、相良にとってもKantの構想力は想像力の換言として解釈されていた。そのことはともかくとしても、想像という主題を「想像の機能によって心の世界が現実を超えてひろがり、豊かさを加えることを否定するわけにはゆかない」として、それを心理学が想像を語らなくなりはじめた60年代の末に相良が語ったことは興味深いことであった。しかも、彼はこの約10年前と20年前にも単著のわかりやすい概論書を書いているが、そのときは想像には触れていなかった（その後の編著においても同様であった）。それだけに、ここでもおむろに想像を取り上げたことは何やら晩年（65歳のときの著作である）にいたっての覚醒のようにもみえる。ただし、「想像と夢」の章には8ページあてられているが、そのうち6ページは夢に関して書かれており、いささかバランスを失っている。だが、これは「想像」と「夢」を並べたときに抛り所となる資料蓄積の相対量を素直に映しだした姿であり、心理学における想像研究のはかどりが思わしくなかったことをあらわしているともいえるだろう。

■ 遠藤汪吉・蓮尾千萬人共編 1970『現代心理学』ミネルヴァ書房・全 286 頁
構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

7名からなる共著で構成された全10章はつぎのとおりである。「心理学はどのような科学か」、感覚、知覚を扱った「環境の認知と気づき」「行動の仕組みとそのへ変容」「意志的行為と感情的体験」、ここで意志的行為が章立てされているのは20世紀前半からの影響が残ったところといえるだろう、「思考のはたらき」「人格」「行動異常の測定」「社会的行動」、概論書としてはユニークな「交通心理学の問題点」これは心理学が現代の問題に取り組んでいる例のひとつとして設定したとある、そして「情報科学の心理学への適用」。このテキストでこの章が最後に位置づけられているのは1970年刊行という当時の状況をよく映し出している。この後の心理学はこの観点が一気に拡大することになる。

因果関係を云々しようというわけではないが、人類の進歩と調和を掲げた大阪万博以降、心理学のテキストでは章のタイトルに想像が登場しがなくなった。これまでの経緯でいえば、想像について記されるとすれば「思考のはたらき」の章であっただろう。しかし、この章では「思考以前の認識」という節から始まるが、それは発達心理学的な観点での個体における一般的な思考の発達過程についての話であり、想像に対する言及はない。また、創造についても触れられていない。むしろ構想への言及もない。

■ 安藤公平・菱倉昌太郎・木村政男・山岡淳 1971『このころの科学』駿河台出版社・全 368 頁
構想なし、想像あり、創造あり、図式なし

「心の科学」「心の発達」「人間の個性」「欲求と適応」「外界の認知」「知性のはたらき」「社会と個人」「心理学の応用」の8章構成である。このなかで「人間の個性」では主として知能や性格がとりあげられ、「知性のはたらき」では学習、記憶、思考、言語といったテーマについて語られている。想像については後者の思考の節のなかで自由な思考として空想や夢と並列させて述べられている。この並列は本稿においては疑問とするところである。また、「推理や想像はいずれも生産的なはたらきを持っていますが、それらは与えられた材料からまったく新しいものを創り出す——というような創造性は持っていません。

これに対し生産的思考、あるいは創造的思考といわれるものは、積極的な問題解決の思考なのです」と述べている。想像に生産的なはたらきがあるとしながら、そのすぐあとにこれに対する生産的思考と述べていることは何やら曖昧である。また、まったく新しいものを創り出すことが積極的な問題解決に結びつけられているが、積極的であるか否かにかかわらず問題解決と創成が直結していることや、想像と創造を独立的に切り離してみようとする理由があきらかにされていない。ごく簡単にいっても創造にせよ生産的思考にせよ、そのプロセスが想像なしにどうして可能になると考え得るのか、あきらかにすべきところだろう。

構想についての言及は認められない。

■ 西昭夫 1973『心理 — 行動からの探究』福村出版・全 234 頁
構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

つぎの全8章構成である「学習と記憶」「感覚・知覚」「性格と人格」「モチベーション」「社会的行動」「行動論と心理学」「行動論と価値論」「心理学の歴史」。20世紀半ばを席卷した行動科学の影響力が残り、同時に1970年代以降に明確になっていく機械論的なモデルにもとづく概念整理、それらによって戦前の心理学にあった哲学的な概念や観点が消え去った20世紀後半の心理学の体系の要点がうかがえる構成になっている。情報処理論的な色彩の強い認知心理学が日本で前面にあらわれてくる一歩手前の時期でもあるから、そこで主題になるようなテーマはまだみえていない。そのこともあってか、「思考」関連の章は存在していない。このように70年代あたりでは「思考」という主題が心理理論の文脈から一旦退く気配をみせ、そののち認知論の隆盛で20世紀末には再登場するのだが、その際は20世紀前半で常識的扱いであった思考と想像の組合せは消えていたのであった。

ここでの関心とは異なるが、章のなかでは「行動論と価値論」がユニークにみえる。だが、ここでいう価値論とは行動理論を背景にして語られたそれであり、行動の原動力としての動因や動機、要求などのことを指している。したがって、C.L.HullやE.C.Tolman、E.Sprangerなどの理論が紹介されるかたちで記述されている。

なお、著者の記述には「構想」のことがたびたび登場する。いわく「シュブランガーの構想はこれらの立場とまったく異なっている」「この構想は、結局、動機づ

けと価値づけの脈絡関係から価値現象の心理学的研究と、価値論の研究との密接な結合関係の重要性を示唆しているものと思われるなど。この「構想」は「考え方」や「思想」や「モデル」などに近い意味として用いられているが、あえてこのことばが選択され、したがって当然ここでは「想像」の言い換えとしてではなく用いられたわけである。であるとすれば、ここで著者がとらえていた「構想」という心的過程の性質は、たいへん気になるところである。だが、この自らの営みに対する心理学的な問いかけや明確化は自明のこととみなされていたのだろう、当の著作においてもなされることなく終わっている。

■ 金子隆芳・古崎敬編 1977『現代心理学要説』日本文化科学社・全 238 頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式あり

5名共著で次の5章からなる。「心理学の方法論と基本問題」「心の構造」「心の機能」「心の発達」「心理学の諸学説」。心の構造では感覚よりの計量心理学的な基本的問題とあわせて、知能と人格についても扱っている。おもしろいのは感覚と感情をまとめて、これにこの時代の心理学ではあまり使われなくなった「感性」のことばをあてていることである。これは範をWundtの昔にとったことに由来しているようである。心の構造では知覚、動機づけ、防衛機制、学習、記憶と思考、言語などをあつかっている。

想像や構想への言及はないが、他のテキストでもときどき認められるように、この教科書でも一般的な文章記述のなかで「構想」のことばを使っている箇所があった。それは「まえがき」冒頭でつぎのとおりである。「本書は大学の一般教育課程の心理学テキストを意図したものであるが、類書は極めて多いので、何かユニークな構想がなければ意味がない。とりたててユニークでないにしても何か見識がほしい」

その結果として類書のように心理学の問題対象別の章立てではなく、かつてTitchenerが生物科学を構造学、機能学、発生学に分けて捉えていたことに依拠して、その3つのくくりで心をとらえ、前後に方法論や基本的な問題と主要学説紹介を挟むスタイルをとったとある。ここに編者の見識、ないし構想があらわれているということになる。このことからすれば、ここで編者の頭の中になかった「構想」の意味とはテキストの全体のつくり、その構造についてのアイデアとか設計、見通しといった

ところだったのだろう。それはあきらかにものごとを進めていく（創作行為をしていく）うえで、先立つ重要な指針とか、方針とか、プランといった思考過程の一部に違いないわけで、それゆえに編者自身、テキスト冒頭でそのことばを用いたわけである。ここでもまた心理学者みずから運用した想像の換言では済まされない構想プロセスの実際が認められる。だが、当の「心の機能」を語るなかで、他書でも繰り返しよく語られてきている思考や記号については説明しているものの、ほとんど語られてきていない当の構想については残念ながら触られていない。

その思考の節では思考をつぎのように端的に説明している。

「過去の単なる保存と再現だけでなく、現在の事態も含め、内的な意識現象として展開性を強くもつのが[思考]である。思考は現在を未来に結びつけ、人間の適応の拡大をはかり、文化を形成する」

なるほどそのとおりだが、この「思考」は「想像」と置き換えてもそのままそのとおりに通じ、このかぎりでは両者に区別は見いだせない。その少し先にはつぎのようにある。

「"考える"という意識の流れ、[思考]は、その展開が比較的自由的な回想・夢想から、方向づけをもった推理・問題解決にいたるまでさまざまな状態をとる」

ここで思考の幅とその両極が語られ、その一方が想像であることが間接的に語られる。だが、そのように説明しつつも、その両極の間については語られず、類書のようにその一方の極である問題解決の部分に話を焦点化している。むろん、これはそれまでの研究の蓄積が一方に偏ってきたことを映し出していることなのだが、それにしても類書にない見識と独自の構想を目論んだテキストとしては惜しいところである。

■ 村田孝次 1979『教養の心理学 改訂版』培風館・全 212 頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

的を絞って構成されたコンパクトなテキストである。以下の6章で構成されている。本能行動や初期経験を話題にした「行動の形成」「学習」「動機づけと情緒」「知覚」「思考」「パーソナリティ」。

創造については思考の章で量を割いて説明している。想像については語られないが、思考の章では「内閉的思考 (autistic thinking)」として問題解決的思考という

よりも願望や動機といった内的状態への反応として生じている思考があるという説明の仕方です空想 (fantasy) や白昼夢、夢について節項目単位で若干語られている。ただしその内容は従前の記述の範囲に留まっている。構想に対する言及はない。

■ 井上恵美子・平出彦仁編 1980『現代社会の心理学』文化書房博文社 全 347 頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

全 18 章からなる 9 名の共同執筆である。章構成は以下のとおりである。「現代社会における心理学」「脳のなかの分業」「知覚の世界」「限りなき欲望」「人間の攻撃性」「イヌの条件反射」「記憶の喪失」「パズルの世界」「チンパンジーのこぼし」「英才児」「孤独を愛する人」「無意識の世界」「組織のなかの個人」「世代の断絶」「テレビとマンガの文化」「長い人生の過程」「愛・性・結婚」「人間性の喪失と回復」。これまでの他書にないユニークな章題で、ハードカバーの体裁からしても意外性を感じさせる。これらの名称をみるかぎりでは話題をかなり焦点化させているように映るが、実際はたとえば、「チンパンジーのこぼし」では一つの節のなかの項目としてその話題が触れられているが全体は人間の言語の獲得や思考との関係、脳の言語中枢や言語と文化の関係などが説明されている。他の章についても同様で、各章のなかのごく一部の話題をとって章題にするという週刊誌的発想の趣向となっている。

執筆の狙いには日常生活にみられる心理現象に広く目を向け、最新の情報をできるだけ取り入れていると書かれている。だが、その期待をもってみると、記述内容の構成はオーソドックスなところに留まり、講義メモ的な書きぶりや本文における原典参照の文献情報が必ずしも記載されていないなど不備が目立つテキストである。「現代社会の」と名うたれているところからの期待感もあったが、想像や構想に対する言及はみられなかった。

■ 小野章夫編 1980『現代心理学の諸相』誠信書房 全 340 頁
構想なし、想像なし、創造わずかな言及、図式わずかな言及

全 10 章、10 名の共著である。章構成は次のとおり

である。「知覚」「学習」「記憶と思考」「神経心理」「発達」「パーソナリティ」「臨床」「社会」「産業」「測定と評価」。

異なる著者がそれぞれの得意とする領域の概説を書いて、それらを合わせることで現代心理学の諸相をあらわした、というつくりとしては 80 年代頃から頻出するようになったインスタントな一冊である。編者はまえがきでこのようにつけ加えることは忘れていない。「本書を通じて個々の執筆者の記述の中にそれとなくみられる主張に、適切なまとまりをつけていただく仕事は、読者の方々に委ねるべきなのかもしれないと思う」と。そしてそのすぐあとに「いろいろなお叱りを受けることができれば、非常に幸い」とも記されている。やや切ない印象を禁じ得ないが、日本の大学が大学紛争の嵐をくぐり抜け、次の少子、全入化の嵐を迎える前の、あらゆることにおいて一番緩く穏やかな空気に満ちていたときの、それを象徴としているような一冊である。

想像や構想への言及は見いだされなかった。

■ 江川致成 1981『心理学』福村出版 全 209 頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

12 章構成で「心理学とはなにか」「行動の機制」「感覚・知覚」「感情・情動」「学習」「記憶と思考」「知能」「人格」「適応と心理治療」「成長と発達」「社会的行動」「現代心理学の特質と今後の課題」となっている。オーソドックスな概論の構成となっている。単著であるため全体のトーンが揃っていて、この点、共著が多くなった時代の教科書としては特色になっている。すでに概論書を編著で出した経験を踏まえてあらためて単著で書いたとあるので、一層まとまりがついているのかもしれない。

「記憶と思考」の章では思考が再生的なイメージや生産的なイメージの操作でおこなわれることが説明されており、それらは昔からの再生的想像と産出的想像の言い換えといいうところだが、想像としては語られていない。構想についても触れていない。

■ 市川典義・増田末雄編 1982『心理学 一基礎と応用』福村出版 全 225 頁
構想なし、想像あり、創造あり、図式なし

全 10 章構成 10 名の著者による編著である。章題は基礎編として「心の科学とその発展」「行動」(動機づけや葛藤)「知覚」「記憶」「学習」「思考」「パーソナリ

ティ」、応用編として「組織と人間」「工学と人間的要因」(人間工学)「ナーシングにおける応用」(心理療法やカウンセリング、援助)となっており、応用編は別とすれば80年代の心理概論書としてオーソドックスな構成となっている。

想像については思考の章でとくに独自の節を設けることなく、現代の思考観を代表するもののひとつとしてW.E.Vinackeの"The Psychology of Thinking (1952)"の考え方を紹介するかたちをとって説明している。すなわち、思考とは内的な要求に対する反応、あるいは外界に生ずる問題への反応として起こるもので、特別な反応が必要でなかったり、できなかつたりする場合は想像と呼ばれ、統制的な心的活動がおこる場合は問題解決や推理となる、という具合で、機械論的、行動論的見解をごく簡単に言及し終わっている。すぐあとにD.E.Berlyneの考え方も短く紹介されているが、彼の自閉的思考や象徴的反応の連鎖などと想像との関係については触れていない。

構想に対する言及はみられない。

■ 蔭山庄司監修 1982『心理学 — 人間行動の科学』北大路書房・全261頁
構想なし、想像なし、創造なし、図式あり

全10章、10名による共著である。章構成はつぎの通り。「心理学の歩み」「現代心理学の課題」「行動の形成(発達と学習)」「行動の機制(動機と欲求)」「感情と情動」「認知と知覚」「認知と記憶」「社会的行動」「パーソナリティの心理」「アンナ・フロイトの児童精神分析」

大部の著書ではないが、はしがぎには基礎的な知見をおさえると同時に応用部門も多くとりいれるように配慮したとその特徴が記されている。具体的な理解促進のために図や表を多用したとも書かれてある。しかし、実際にはそのようには見えない。見込んだ狙いどおりにいかない共著テキストの困難さが漂っている。思考に関する章設定がないこともあり、創造や想像、構想への言及はない。

■ 濱田哲郎・園田五郎・白樫三四郎編 1982『現代の心理学 — 人間の心理と行動』朝倉書店 全234頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

総ページ数からするとかなり細かな16章構成で、そ

れらは「科学としての心理学」「発達の決定要因」「動機づけ」「適応の機制」「学習の原理」「知覚と記憶」「行動の制御」これは行動療法やバイオフィードバックなどの話題、「言語と知能」「パーソナリティ」「情動と睡眠」「思考と問題解決」「精神健康と治療」「社会的行動の基礎」「対人行動」「社会的役割と社会的異常行動」「集団の効果」となっている。やや独特の主題組みや話題もみられ、この時代のテキストとしては個性的かもしれない。他書とは異なり、人間の行動をその底流にあるプロセス、個人の行動特性、自己と他者のかかわりの3つの柱でとらえて、それを基本、発展、情報処理、制御という観点で切り出すという独自の構成を図った、と説明されている。その目的に沿ってのことだったのかもしれないが、それほど大部でもないこのテキストが編者3名、執筆者23名(ほとんどが九州の大学の教員)からなる編著になっており、執筆者数が章の数より多いというあたりも、ユニークな章の成り立ちにつながったのかもしれない。

想像については「思考と問題解決」の章で創造的思考の説明において「創造的思考は第1に想像と思考の両方の働きが統合されたものとみることができる」と述べられている。だが、その一方の思考については章を割いて説明されているが、他方の想像については説明なく済まされている。したがって、この創造的思考に関する説明は半端で理解が困難になっている。「想像でイメージをつくり出し、思考で論理的に筋道を立てて考えるのである」という補いもあるが、何のイメージをつくり出すのか、筋道を立てて考えるのはそのイメージについてなのか、あるいは別のことなのか、想像と思考の働きの統合はどのようになされて創造的思考になるのか、想像が著者の想像のなかで規定されたままで、読者にその困難な共有が任された状態に終わっていて残念である。したがって、想像のことばと作用の記述はあるが想像についての説明はないので言及とはみなさない。構想への言及もなかった。

■ 森野礼一編 1982『現代の心理学』ミネルヴァ書房 全259頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

人間行動に関する心理学研究に的を絞るというコンセプトに立った10名の教育心理学系の著者による共著である。章構成は「心理学とはなにか」「動機と行動」「感覚と知覚」「発達と教育」「学習の心理学」「思考と創造」

「知能」「人格」「臨床心理」「非行と犯罪」「社会と文化」「環境心理学」の12章である。最後の章はこのテキストのユニークさをあらわすものとして位置づけられている。

他のテキストに関しても指摘した同様のことが本書の「思考と創造」の章に認められる。そこには冒頭部分につきのようにある。「最近は、(思考を) それら(概念・判断・推理などの心的活動)にかかわりのある精神機能をあわせて、知覚・学習・記憶さらに想像力・創造活動を含め総合的なものとする傾向が強くなっている」

この導入のもとで創造についてはお馴染みの説明がなされるのであるが、もう一方でせつかく指摘しながら想像力についてはこれ以上何も触れていない。お預けに終わっているだけに構想についてはまったく語られていない。

■ 白井常 1982『心理学 一人はどう生き、考え、集うのか』光生館。全219頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式あり

教科書だが教科書の常識を破って、新進気鋭の心理学者8名が自分の抱いている関心を中心に、それを初心者に伝わるように書いたという編集方針がはじめに掲げられている。そうしてまとめられたこのテキストは「人間とは何か」にはじまり、「人格」「発達」「社会」「文化」「言語」「思考」「記憶」「知覚」と連なる8章構成になっている。確かにこの構成順は他書の常識を破って逆転している。著者も確かな陣容だが、結果的に書かれた内容は伝統的な教科書としての記述に留まっている。副題の「人はどう生き、考え、集うのか」は魅力的だが、その答えなり応えが少なくとも直接的には読者に伝わるかたちにはなり得ていない観がある。

ここでの関心に沿えば「思考」の章が目に見える。この章は安西祐一郎が担当している。思考を構造と方法と表象という3つの切り口でとらえ、構造についてはプラン、方法については推論、表象については知識をあて、思考における言語、知識、情報のかかわりについて従来型の説明様式とは積極的に異なる仕方、しかしこれまでの典型的な成果をカバーしつつ要領よく説明している。ここではまさに想像や構想の話が展開されているのだが、そのことばは使われていない。したがって、たとえばひとつの結論として「思考と表象との関係として、思考は知識の抽象的な表象を操作してより知覚や言語に近い形式の表象を呼び起こし、その具体的表象や抽象的表象の操作によって思

考が発展すると考えるのが、最も妥当なようである」と語られているのだが、これは本稿の2、3、7章などで確認したように、すでに知覚、観念、想像、記憶の関係性として20世紀前半の心理学者がたどり着いていたことである。換言すると、20世紀後半、行動理論と情報処理論を經過して至った心理学は想像や観念のことばに入念な覆いを被せうえで。その同じところに表象や知識、概念といったことばをもってきて、多くのところを語り直した、という一面がみえてくる。

■ 小口忠彦 1983『人間のこころ 心理学はどう答えるか』有斐閣 全256頁
構想なし、想像わずかに言及あり、創造あり、図式なし

著者自身の思索と口語風の文体で綴られたテキストである。したがって、章構成は他書と異なる独自性もっている。心理学研究に関する自分史と本書執筆にいたった経緯を記した長い序章につづいて、つぎの11章で構成されている。「自己実現の心理」「人生周期の心理」「課題の構造」、これは人間不在の心理学、体系的な法則と歴史的な法則、普通一普通以上一健康、人間はいったいどこへいくのか、といった節で構成されている。「集団の構造」「創造の構造」「学習の構造」「意識の構造」「欲求の心理」「情操の心理」。

著者は学習や人間性の他に、創造性や才能に関する研究者の一人であるから、このテキストにおいてもそれらの内容が相対的に厚くなっている。想像についてはとくに項目を立てての説明はなく、「自己実現の心理」という章で、実際の経験との比較で自我関与の程度が弱くならざるを得ないイメージによる経験という文脈で触れられ、「心理学では、想像とはイマジネーション(imagination)であり、イメージをつくる機能のことです」と短く言及するにとどまっている。構想に対する言及はない。

ただし、文章のなかに「『人間における自由』は『自由からの逃走』の続編ともいうべきものであって、この双方のうちにフロムの発想と構想とがまとめられている」という文があるから著者のなかに「構想」概念についての認識があることはわかる。『心理学はどう答えるか』というこのテキストの副題にならつていうなら、仮に心理学にとって「構想」は説明不要の自明なことからなのだとすれば、せめて自明であるとするこぼくらは確認したいところである。

■ 金城辰夫・野口薫執筆代表 1984『心理学概論 — 現代人のこころを解明』有斐閣・全484頁
 構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

はしがきによれば、心理学は人間性の理解を目標にしているものでこのテキストは「現時点での心理学的知見を盛り込むべく最善の努力が払われている」とうたわれている。全9章構成の8名からなる共著である。章題は次のとおり。「心理学の歴史と方法」「知覚」「学習・記憶」「思考と言語」「動機と情緒」「知能」「パーソナリティ」「発達」「社会的行動」。

20世紀後半から末にかけての心理学概論の構成としては、ごくオーソドックスなスタイルをとっている。思考の章にはかつての「想像」にかわって「言語」が並び立ち、それと思考の関係が話題の中心になっている。また意志のことばも消え、対応する概念として動機が浮上、感情は情緒となっている。80年代半ばのこの時点ではかつての行動もほぼ学習と動機のなかに帰されている。構想への言及はない。

■ 漁田武雄・岡野恒也・真田孝昭・高嶋健一・高橋たまき・中森正純・林部敬吉 1984『心理学』酒井書店・全280頁
 構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

全11章で7名の共著、章構成は以下の通りである。「科学としての心理学」「人間と動物」「行動の生理」「知覚と行動」「行動の喚起」これは動機づけや葛藤、情動を扱っている、学習を扱った「行動の変容」、記憶や知識の構造を話題にした「高次の行動」、知能と性格を扱った「行動の主体」「行動の異常」「行動の発達」「社会的な行動」。

科学としての心理学が語られた冒頭の章で「現代の心理学は、多かれ少なかれ新行動主義的である」と結論づけている著作である。それを反映して、章立てには行動ということばへのこだわりが認められる。この固執は80年代半ばのテキストとしてはやや時代的に後退していた気配を感じさせる。ただし、共著ということもあってか、実際の記述には行動へのこだわりが必ずしも貫かれているわけではない。それだけに、余計に行動のことばが冗長に感じるテキストである。

ここでの関心にあたる部分は「高次の行動」かもしれないが、そこでは記憶や知識が語られるも想像への言及は認められない。全体でみて想像や構想については触

れられていない。

■ 中川大倫 1985『心理学概論 II』日本放送出版協会・全162頁
 構想なし、想像なし、創造なし、図式あり

放送大学テキストとして大山・詫摩の『心理学概論 I』を前提に15回分の授業に対応するように著された教科書である。したがって、その『I』で扱われなかった内容について、つぎのテーマでそれぞれ1~3回の章に分けて構成している。「心の発達」「環境の認知」「学習」「記憶のシステム」「認知」「個人差」「社会的行動」「要求(動機)と阻止現象」「指導と治療」。

環境の認知では主として知覚過程が語られ、知覚形成における主体的要因として構えや図式、期待などに触れている。近いところを語りながらも、想像や構想への言及はない。また、空想についてはフラストレーションの機制としてFreudの防衛機制のパターンをいくつか例示するなかで、そのひとつとして説明している。全体的にはオーソドックスな理論・概念の説明を中心にした教科書である。

■ 伊吹山太郎監修 1994『現代の心理学』有斐閣 全276頁
 構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

著書としては標準的な分量だが、総勢20名による共著である。大きな括りとして「知覚・感覚」「認知・学習」「パーソナリティ・臨床」「社会」「産業」「教育」「発達」「老年」の8章構成で、それぞれに著者のおそらく得意とするテーマで20編の節が編まれている。概論として一貫した筋を通すことよりも、概論のおもむきもちながら、執筆者それぞれのトピックスを集めることで現代的な心理学の諸相を眺望しようとした割り切りがある。そのため、概論とすれば、かなり特異なトピックスと思われる「フランス経済心理学覚書」とか「遠ざかる友」「里親・養親家庭における親子関係」といった節もほとんど唐突にあるのだが、他にすでに溢れている概論書を前提とするならば、かえってそれらにもれている現代的なテーマをおさえるという意味では存在意義を訴えるといえる。同様の意味で90年代半ばにあつて、急速に進行しつつあった超高齢化時代を反映して「老年」という章を設けて「高齢者の死の意識」と「長寿と健康の

心理学」という2編をあてていることも適切に見える。
ただし、話題を絞っているだけに思考関連の話題はな
く、想像や構想への言及もない。

■ 伊藤隆一・千田茂博・渡辺昭彦 2003『現代の心理学』金子書房 全220頁
構想なし、想像なし、創造なし、図式なし

全12章で「現代の心理学」「生理学的基礎」「感覚と知覚」「動機づけ・欲求・動機・情緒」「学習」「記憶」「思考と知能」「パースナリティ」「発達」「臨床・教育」「社会」「産業」で構成されている。

工学部など理系学部の学生にも馴染めるように書かれたというコンパクトなテキストである。したがって、心理学概論書としての定番項目で構成されているが、20世紀後半の同様のテキストと1点だけ異なる特徴がある。すなわち、限りあるページ枠のなかで、かつてであれば割愛されたはずの「臨床・教育」という章立てが加わっていることである。

「思考と知能」の章には思考の定義を示している項で「思考には、何らかの状況に直面し、問題を解決するための行動として、推論、概念形成、意志決定、洞察、試行錯誤、直観、想像、空想などさまざまな心理過程が含まれている」という一文がある。しかし、その最後の部分にあげられた直観、想像、空想についてはそのあとで触れられずに終わっている。構想への言及も見あたらない。しかし、この記述からわかるように、思考をはじめとする心的過程に想像や空想が関与していることは十分、認識の内にあるのであって、ただとりわけ概論のテキストにその話題を膨らませて書けるだけの研究知見がないということのあらわれとみることができる。

■ 無藤隆・森敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治 2004『心理学—Psychology: Science of Heart and Mind』有斐閣 全592頁
構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

章立ては「心理学とは何か」にはじまり、「脳と心」「感覚と知覚」「記憶」「学習」「言語」「思考」「情動」「動機づけ」「性格」「子ども時代の発達」「青年期・成人期の発達」「人間と社会」「社会的認知」「自己」「社会的影響」「人間関係」「集団」「発達の支援」「発達の病理と心理臨床的援助」「ストレスと心理的障害」「カウンセリング」

「カウンセリングの実際」「カウンセリング・心理療法と文化」の全24章構成である。

著者たちが執筆にあたって願ったことは「本格的かつ専門的な参考書として、しっかりとした体系的な知識を身につけてほしい」ということであつたと記されている。20世紀後半、心理学の概論書はこのテキストのほぼ前半を全体とした内容で成り立っていた。それが概論として心理学を語るときの知識の体系であつた。一方、このテキストでは分量的にはその倍にあたるところに、社会心理と発達心理、そして心理臨床の話題を加えて心理学概論の全体としている。ここにはかつてはアカデミックな一般心理学の知識といえば、ほぼ実験心理学を中軸として語られていたものが、21世紀に入ってから資格講座としての心理学が大学の心理学の顔になるような変化があつて、かつての専門ないし特殊としてあつた心理臨床の話題が大幅に入り、その資格取得をも視野に入れた概論の構成をせざるを得ないように変化したことが反映されている。一般心理学の姿があきらかに変貌したのである。

ここでの話題からは逸れるが、かつてはこの内容の前半に相当するところを通年4単位30回の授業でこなされていたのが大方の心理学概論の姿であつた。それがいまは半期2単位15回に、このようにその倍の話題に触れることが心理学概論の姿になっている。しかも、大学はユニバーサルアクセス化が進み、短大も含めれば日本全国に1000以上ある大学のほとんどでは入試が事実上、空転して選抜の意味が機能しない状態になっている。つまり、希望する人には誰にでも大学の心理学概論が開かれている状態になった。ほぼ世紀の変わり目を境にして急激に進んだそうした2つの方向での大変化のなかで、本書は心理学概論の教科書がどのような姿で、その内容を伝えているかを知り、またこの状況を考えるにはよい素材になっている。

これは心理学に限らず、あらゆる学問分野について語れることであるが、学問人口が著しく増えて、知識蓄積も急増した成果として、ほとんど必然的に広く厚くには確かになったのだけれども、人間一人ひとりにはそれに対応して急変化できているわけではないから、結果としては薄くなり、知識の体系化という名の下に単なることばの整理がなされているにすぎない不安を感じさせる。端的に言えば、高校以下の受験参考書のような様式に大学のテキストが変化していくことは、すでに医学や看護学の領域では現実になっているが、心理学のテキストにもそうした気配が生まれつつあるようだ。

なお、思考の章では創造的思考について節を設けてま

とめられているが、他のところも含めて想像や構想に対する言及はない。

以上の50冊で概論書における「構想」と「想像」への言及、扱いについての概括的な傾向は通覧できたと思われる。この状況からして種々の各論書が市場に出回るようになった20世紀の最後の四半世紀以降では、本来「構想」や「想像」が主題として扱われるであろう「思考」や「認知」「創造性」といった領域での各論書でも、その扱いはほとんどなかったことが容易に推測できよう。ここではそのきわめて大まかな確認の意味で、相当領域の和書、各論書からランダムに6点を取り上げて、上記と同様のスタイルで以下に付け加えておく。

■ 穂山貞登 1962『創造の心理』誠信書房。
構想あり、想像あり、創造あり、図式なし

5章構成で、章題はつぎのとおりである。「創造の過程」「創造する人」「創造における個人と社会」「工夫する技術」「創造理論のまとめ」。

創造過程の心理を語るなかで、想像力の働きを積極的に捉えようとした一冊である。とくに創造的想像という概念に着目しながら「対象が存在しないものとして認知される想像が、対象が存在するものとして認知される知覚よりも、なぜ、創造において重要とされるのか」と問い、その答えを求めようとしている。

何度か Kant や三木清の構想(力)の見解を引用しており、そのたびにそれを想像(力)と書き直すわけにもいかず、構想(力)と引用しているが、穂山自身はあくまで構想は想像の換言にほかならないとみる立場である。それを貫くように、引用のそばから想像(力)としてそれを引き受けて書いている。ユニークなところでは種々の感覚的な刺激を与えて、その結果生ずる想像の内容とともに感情の高低変化の関係を捉えたネチャエフ(Netschajeff, A.)の実験を紹介し、彼がドイツ語の論文で感情の変化が随伴する想像のありようを構想力(Einbildungskraft)と呼んでいたこと紹介している。穂山はそれを「想像力と訳してよいと思うが、一応区別しておく」として構想力としている。構想は想像の言い換えという立場をとりながらも、構想(力)に気をとめていたことが読み取れる。

■ 八木冕編 1970『講座心理学 第8巻 思考と言語』東京大学出版会。

構想なし、想像なし、創造あり、図式わずか言及あり

9章構成でその章題は次のとおりである。「序論」「思考研究の方法」「生理心理学の立場からみた思考と言語」「文法と情報処理」「学習と思考」「認知と概念」「問題解決」「言語と思考」「創造的思考」。

その序論の章を担当した東洋は述べている。思考の研究とは広義には「現前する刺激に対する短絡的な反応を抑制しながら、別の反応に対する準備を行なうような内的過程を対象とする研究」である。その内的過程の活動は概念、言語、あるいは運動や知覚の表象によって営まれているとする。とすれば、その主要過程には判断や推理、問題解決といった思考らしいテーマが並ぶことは当然としても、そこには20世紀前半の心理学で常にとりあげられていた想像そのものも、また構想もその中心的な主題のひとつにあげられるように思われる。だが、この書で「創造」に一章を設けながらその研究には「実験心理学の科学的な基準」を満足させることができていないと序論で語っているその同じ理由からであろうが、想像や構想への言及はない。

そうしたなかであって、この書のなかで「創造的思考」の章はやや異質な面持ちをもっている。そこでは日本における思考研究の起点に位置づけられる矢田部(1948)を引き、そのなかで語られている Würzburg 学派の O.Selz が語った再生的思考と生産的思考に依拠して、問題解決場面において既得の手段によって解決していく場合を再生的思考、既得手段に何らかの刷新を図り、機能の革新をもたらすような場合を生産的思考として区別した上で、創造的思考の場合は当然、生産的であるうえに、とくに一層高度な機能的刷新がみられたり、飛躍的な構造変化が生じるもので、ときには問題解決以前の問題発見までしてしまうとしている。

最後の方には創造的思考の実体はそれ自体が創造的で視野の広い研究による必要があるとし、思考が創造的に働くための諸条件を社会環境の変化や現実の営みのなかで関係諸科学との関連のなかでおさえていく必要があると述べている。ただし、そうした構想の営み自体への検討はなされずに終わっている。

■ 恩田彰 1971『創造性の研究』恒星社厚生閣・全496頁
構想あり、想像あり、創造あり、図式なし

創造性については20世紀半ばの Guilford の研究を

中心に、心理学でも一定の研究が定常的になされてきた。とはいえ、創造性に対する社会のなかでの要請や期待は益々高まる一方であり、その求めの勢いに比較すると、あらためて「なぜこんな大切な問題を学問として真正面からとり扱わなかったか」ということがわかり、それがこのテキスト執筆の動機になったと記されている。

正面から扱われてこなかったのは、創造性の問題には「未知のことが多く、研究の方法も見つけにくく、どこをどうつかまえていいか見当がつかなかったからである」としている。確かにそのとおりである。それは裏返していえば、少なくとも実験心理学百年の歴史における日本の研究史はよくできた研究の追試や展開に集中してきたためだろう。むろんまずは学問としての基礎固めが少なくとも70年代までのテーマであったということもある。

そうしたなか創造性研究が増えだし軌道に乗り始めたことを見据えて著者は20年来関心をもってきた創造性に関して、そもそも創造性とは何か、それは測定できることなのか、メカニズムはどのようになっているか、どうすれば創造性は開発できるか、創造性を促進あるいは阻害する条件は何か、という5つの問題を柱にしながら約500頁からなる総論を著している。全体は三部からなり、第一部は「創造性の基礎」と題され、「創造性の思想の展開」「創造性の意味と構造」「創造性の研究方法」「創造性の測定」「創造活動の動機」「創造性とESP」「創造性と社会」の章、第二部「創造性の開発」は「創造性教育の原理」「創造性の開発法」「創造性開発の促進・阻害条件」「科学技術者の創造性の開発と研究管理」の章、第三部「禅と創造性」は「禅と創造性」「座禅と心理学的特徴」「自律訓練法と禅」「禅と睡眠」「睡眠と創造性」の章で構成されている。これらの章題をみるだけでわかるように、実験心理学の枠を超えて応用面や超心理学、禅にいたるまで柔軟、広範な記述が展開されている。

想像(力)や構想(力)への言及も主として創造力の基礎を語るなかで「想像力」の1節を設けてなされている。そこでは経験に先立つアイデアを語ったPlato、連想の法則に着目してのちのちの連想心理学の源流をなしたAristotle、能動的な記憶像の結合に想像力の働きをみたAugustinusという具合にPlato以来、近代啓蒙期のHumeやKant、19～20世紀のJ.S.MillやDilthey、Ribot、そしてSartreなどにいたるまで、想像や想像力について語った哲学者や心理学者たちの見方を、数行ずつ簡潔に紹介している。そのうえで創造における想像力の働きが基本的に重要な役割をもっていることと、創造

性開発の文脈で想像力を育成する方法が指南されている。ただし、想像や想像力そのものに対する考察はおこなっていない。

構想力についてはKantが用いたEinbildungskraftに言及し、簡単にまず「これは想像力と同じ意味である」と述べる。そのうえでKantが構想力を感性と悟性とを結合する能力としてみていたことや、連想によりイメージを再生する再生的構想力と直観にもとづく多様なものを一つの形象につくりあげる生産的構想力の2つを捉えていたこと、などを記している。さらに三木清の場合は構想力をイメージをつくりだす能力で主観と客観の能力、知的なものや感情的なものが結合したものとみていたことを述べる。そのうえで「この構想力の概念には、一般に想像力と比べると、一種の重みを感じられる。というのは構想力には思考の特徴がかなり含まれているからである」というかたちで示差的言明をし、構想力へのコメントを結んでいる。つまり、構想力は想像力のことだと切り出しながらも、Kantと三木の構想力を語るなかで単なる想像力とは異なり「一種の重み」を感じ「思考の特徴がかなり含まれている」という特殊性を語るに至っている。

構想については別の箇所でも触れられており、それは創造性の開発にあたって発想のプロセスが重要であることを語るなかで、そのプロセスを分析するとそれ以前に着想に始まり、発想のあとに構想の段階がつながるという見方を提示している。

■ 坂元昂編 1983『現代基礎心理学 第7巻 思考・知能・言語』東京大学出版会。
構想なし、想像なし、創造わずかに言及あり、図式なし

はじめに2章を割いて心理学における知的行動研究の展望と構造について記述している。これは20世紀後半の時点での同分野、つまり「構想」も当然かわる人間の心的活動についての心理学研究のありようを把握するうえで役立つ。この章を著した坂元は、人間の知的行動や活動に対する心理学研究は1960年代頃から起こった心理学思潮の転換、すなわち行動主義的な考え方が全盛であった時代から、Piagetの研究成果が普及したり情報処理論的な認知心理学の見方が次第に広まってくるにつれて本格化してきたと書き出している。ただし、それ以前にも行動主義一辺倒ではなかった欧州諸国ではさまざまなアプローチで人間の知的行動の探求がなされてきたとまとめている。その成果のなかで英国のG.McKellar(1957)による"Imagination and

thinking" の存在を記しているが、惜しいことにのちの記述では同書で扱われているごとの想像に関する言及がない。

坂元自身は知的行動の研究対象として D.A. Norman (1981) があげた内容を拡張し、つぎのようにまとめている。外部要因として刺激と概念学習や推理や問題解決といった課題、内部要因としてイメージ、記憶事項、概念、言語、手続き、ルール、スキーマ、フレーム、スクリプトといった構造、コード化、リハーサル、チャンク、推論、決定、比較、見直し、フィードバックなどの機能、加えて注意、感情、動機づけ、また知的行動に影響を与える経験、文化、年齢、性などである。これらの研究対象の枠組みをみると、本書が書かれた 80 年代の状況がよく映し出されている。すなわち、感情や動機づけ、あるいは文化といった人間特有の営みとの関係をとらえ主体的、能動的な、しかも日常における生活体としての人間をおさえようとしている。それと同時に、70 年代以降に顕著になったコンピュータモデルのメタファーに基づく情報処理論の影響を受けた工学的発想の（いわゆるボックスと矢印の）モデルが組み合わさった見方が展開されている。このなかで「構想」は「想像」とともにおそらくイメージ、手続き、スキーマといったところで相当程度に被ると思われるが、工学寄りのカタカナ概念が選択されている。

その他、この著書では問題解決をめぐる基本的な課題、概念的思考や判断や決定に対する情報処理論のアプローチ、文章の理解、言語行為としての会話の構造、知識の伝達、また当時の時代状況を映し出すように人間の思考との対比で人工知能について扱っている。

なお、冒頭の章には Norman (1981) が認知科学という新たな学問領域を提唱していることを紹介し、つぎのような記述がある。「認知心理学と人工認知システムの研究、生物科学、社会科学における認知研究を加えて、認知科学をつくらうとする構想である」。つまり、このことから「構想」という行為を、その記述そのものからわかるように典型的な知的行動として同定しており明記しているわけなのである。だが、その行為については研究対象として省みられていないことがいかにも惜しいところである（なお、この著書では他の箇所でも文章表現のうえで「構想」ということばが用いられている）。

このトリビアルな点こそ注目に値する。つまり、このように「構想」ということばをあきらかに人間の行為のひとつ、しかも他のことばではなく、そのことばで表現するにふさわしい特定の心的営みを指すものとして自然に用いているにもかかわらず、ではその「構想」とか

「構想する」という行為はどのような行為なのか、想像ではなく、空想とも異なり、創造ともプランともスキーマともいいがたいそれはどういう性質の心的過程なのか、という問いかけと応答が置き去りにされているのである。

■ 中島秀之・高野陽太郎・伊藤正男編 1994 『岩波講座認知科学 8 思考』岩波書店。

構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

20 世紀後半に典型的な学際領域の学問として姿をあらわした認知科学を 9 巻構成でとらえた講座シリーズのひとつである。編者たちによれば、編纂にあたり、認知科学の目標を「人間を含む生体における認識の諸現象を、情報科学の方法を道具として解析すること」とし、「認識現象を理解しようとする試みは」「少なくとも 2000 年からの歴史をもっている」がその試みにさらに加わろうとするのは「神経科学、心理学、情報科学の方法論を基礎にして、認知科学の新しい枠組みを」提示しようとしたためであるとしている。

このような研究フレームに合わせて本文の構成も大きく 3 つの章でできている。「思考の心理学」と「思考機能の脳内メカニズム」そして「思考の計算モデル」である。「思考の心理学」の章では思考研究の歴史的な流れを追いつつ、その全体を俯瞰したうえで、少し焦点を絞り、問題解決にあたってのバイアスの問題、知能や創造性、思考と文化の関係といった話題をとりあげ、最後に近年の認知科学研究の文脈のなかでの思考研究を概観している。

2 千年以上にわたる認識研究の流れを継承して現在に至っている認知科学において、その主題の中心は変化することなく人間の認識過程の解明にあるという前提のもとに書かれているわけだが、内容はどうしても心理学約 1 世紀の歴史のなかでの思考研究の幅に制約されている。心像とイメージの話題については Würzburg 学派の無心像思考の話を通して触れられ、また構想と強く関わるようでありながら、そうでもなさそうな「構え (set)」の話題も問題解決や創造性とのかかわりで、取り上げられているが、過去の知見の紹介に留まっている。ただ、創造性について少し詳しく触れた節の結びのところで、創造性思考という切り方がいわゆる人間の普段の思考と異なる特殊性に注目しすぎ、思考一般との連続性を見失っているむきがあること、逆に普段の思考過程について解明することは必然的に創造性を探ること

になるのではないか、というコメントを残している。これは日常一般の思考における構想の営みへの接近態度につながるころではある。

2章の「思考機能の脳内メカニズム」は思考システムの下部構造として、このテーマでは扱われることが少ない小脳の関わりを比較的大きくとりあげ、思考システムとしての統合脳の考え方を提示している点が特徴的である。だが、神経科学からのアプローチであるため、構想や想像への接近に到らないことは当然ともいえよう。そのことは3章の「思考の計算モデル」も同様であり、この場合は工学的発想での情報科学の観点からの接近であるから、推論過程や知識表現を中心にしたデータ構造と計算としてのプロセス表現、そのなかでの心のアーキテクチャのモデルに迫るという流れで書かれており、やはり構想や想像の世界とは異質な典型的な悟性的思考の領域に焦点が当てられている。

■ 市川伸一編 1996『認知心理学 4 思考』東京大学出版会。

構想なし、想像なし、創造あり、図式なし

90年代半ばに刊行された認知心理学のシリーズ本の1巻である。シリーズ序文の冒頭に「認知心理学とは、人間の「知」のはたらきを解明しようとする、新しい科学である」と定義している。その宣誓的定義にふさわしく思考を扱ったこの書では心理学での思考研究の伝統的なテーマともいえる問題解決や推論、創造性といった問題対象の他に、意思決定や人工知能、批判的思考、確率判断、メタ認知、発想支援や社会心理学の文脈での状況認知、社会的認知などの新しいテーマにも光を当て、広範、柔軟に思考研究を展望している。その点で過去の思

考をテーマにした類書とは一線を画した鮮度が感じられる。

心理学の思考研究の歩みを概観している序章で、市川は60年代以降コンピュータが研究に用いられるようになって発展したシミュレーションによる思考のプログラムを検証する手段としてプロトコル分析が盛んになったことを説明している。そのくぐり、プロトコル分析の眼目はプロトコルそのものを集めて整理するようなことではなく、その背後にある処理過程を推測してモデル化することにあるとしている。その背後にある過程はかつてのWürzburg学派が唱えた無心像思考にも重なるところかもしれないが、同時にそれはKant的な意味での「構想」にも相当すると思われるところである。同様のことはこの書物で扱われる人間が一般的にもつ素朴理論やその文脈でのメンタルモデル、あるいはメタ認知とも相通じる。ただし、この書物においても全体を通してやはり「構想」および「想像」への言及はない。

★

なお、The Plebs Textbook Committee (1924) の小宮義孝訳 (1931) になる『心理学概論』には「理性」の章に「構想」というタイトルの節がある。ただし、これは原書で imagination とある部分の訳であり、その内容は再生想像を主体とした心像の組み合わせに関する短い説明になっている。翻訳書であることもあって本資料には加えなかった。

参考文献

半田智久 2004 「構想を語る著者たちは「構想」の意味をどのようにとらえているか」構想, 3, 87-106.

Holt, R.R. 1964 "Imagery : The return of the ostracized" American Psychologist, 19, 254-264.

2011年6月30日 受稿